平成 26 年度

あうるすぽっとアートマネジメント研修事業報告書

はじめに

第 8 期あうるすぽっとアートマネジメント研修生の 8 名…なにやら末広がりな将来を予感させる彼女たちも、いよいよ研修修了の春を迎えました。二十歳そこそこの現役大学 2 年生から一線で働いてきた社会人経験者まで、幅広い人材が集まった今年度です。学業・部活・研修の間を熱心に走りまわる者や、スタッフのアドバイスに従い遠方のセミナーまで足を運ぶ積極性を見せる者もおり、それぞれの将来に向けて一人一人個性的な取り組みを行っていたのが印象的でした。

そんな彼女たちが研修の集大成として企画制作を行う「インターン生企画」のテーマに選んだのは、「就活」。現在学びの場に身を置き、就職という形で社会へ飛び出さんとする自らを「社会人予備軍」と称し、同じ悩みや不安を持つ同世代の若者に向けて、インプロビゼーションという演劇的な手法を用いての問題解決の提案を試みたものです。研修生のアイディアをより実践的に組み立てるために、進行役をお願いした即興パフォーミング集団「6-dim+（ロクディム）」の皆さんには、研修生に対して事前にワークショップを行って共に問題点を洗い出す作業に、お付き合いいただくなどのご協力もいただき、大変助けていただきました。

実施当日は運営の傍ら、ワークショップの様子を新聞やコミュニティテレビなどの取材にてインタビューを受けるなどの経験もし、小さな積み重ねを経ての努力が結実した実感を掴んだのではないでしょうか。実際に社会に出てから困難にぶつかることも少なからず出逢うでしょうが、この充実感を忘れず、諦めずに前進する力と姿勢を更に身に着けて欲しいと願っています。

平成 27 年 3 月

あうるすぽっと

目次

はじめに 2

Ⅰ.公演事業 5

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014

KUNIO『ハムレット』 6

地点『コリオレイナス』 8

『しぇいくすぴあ寄席』 10

『ロミオとジュリエットのこどもたち』 12

あうるすぽっと＋毛皮族　共同プロデュース　『じゃじゃ馬ならし』 14

あうるすぽっと×アンスティチュ・フランセ東京　『インサイドナイト』 16

あうるすぽっと×fabien prioville dance company 共同制作　SOMA プロジェクト　『出演者募集 Audition』 ... 18

Ⅱ.教育普及事業 21

公立学校アウトリーチ　文京高校コミュニケーション能力向上プログラム 22

舞台技術・制作講座　「舞台技術の基礎講座」「舞台制作の基礎知識」 24

～近藤良平・コンドルズ、池袋大作戦！！池袋の街で大盆踊り大会～‘にゅ～盆踊り’ 26

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014　ホワイエ展示　シェイクスピア城 28

視覚障害者お出かけ支援講座 32

鴨下信一　「日本語の学校」 34

あうるすぽっと＋都立大塚ろう学校＋NPO 法人大塚クラブ協力事業

「からだでコミュニケーション」ダンス・ワークショップ 36

あうるすぽっとホワイエリーディング　劇団昴音楽朗読劇『クリスマス・キャロル』 38

あうるすぽっと×日本大学芸術学部共同研究事業　『としまっぷ計画』 40

アートマネジメント研修生企画　「社会人予備軍のためのコミュニケーションワークショップ」 42

豊島区立中央図書館　特別展示 44

Ⅲ.アートマネジメント研修 49

アートマネジメント研修プログラム 50

研修生レポート 52

編集後記 60

Ⅰ．公演事業

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014

KUNIO「ハムレット」

デンマーク王子の復讐を描いたシェイクスピア四大悲劇のうちの一つである「ハムレット」を、公共劇場四館よる共同製作により、プロデュース企画団体 KUNIO が制作。存在する三つの「ハムレット」印刷原本の中でも最古の Q1 バージョンを基に新たに構成した新訳台本が用いられた。約 2 時間半という短い時間の中で、シンプルな黒い舞台とともにハムレットの世界を今までにない形で観客に提示した。

■公演データ■

日時	2014 年 8 月 1 日（金）～ 3 日（日）
会場	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
入場料	一般：3,500 円　豊島区民割引：3,000 円　学生：2,500 円　障害者割引：2,000 円
来場者数	736 名
脚色・演出	杉原邦生
出演	内田淳子、菊沢将憲、箱田暁史、福原冠、岡野康弘、熊川ふみ、後藤剛範、森田真和、田中真之、重岡漠、笹木皓太、むらさきしゅう、木之瀬雅貴 鍛治直人
主催・企画・制作	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区、KUNIO
助成	一般社団法人全国モーターボート競走施行者協議会 一般財団法人地域創造、公益財団法人セゾン文化財団 平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■演出家プロフィール■

杉原　邦生（すぎはら　くにお）

演出家、舞台美術家。1982 年東京生まれ、神奈川県茅ケ崎育ち。
EXILE ファンクラブ“EX FAMILY”会員。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科第 2 期卒業生。同学科在籍中より、演出・舞台美術を中心に活動。人を喰ったような生意気さとポップなバランス感覚を兼ね備えた演出が特長。
歌舞伎演目上演の新たなカタチを模索するカンパニー“木ノ下歌舞伎”には、2006 年より企画員として、『義経千本桜（「椎の木」「小金吾討死」「鮓屋」）』、＜CoRich 舞台芸術まつり！2013 春＞でグランプリを受賞した『黒塚』、フェスティバル／トーキョー13 公式プログラム『東海道四谷怪談―通し上演―』などを演出。また、こまばアゴラ劇場が主催する舞台芸術フェスティバル＜サミット＞ディレクターに 2008 年より 2 年間就任、2010 年からは KYOTO EXPERIMENT フリンジ企画のコンセプトを務めるなど、持ち前の「お祭好き」精神で活動の幅を広げている。

■公演中の様子■

個性的な現代風の衣装からもキャラクターの性格が読み取れる。

デンマーク王子として、一人の若者として、悩めるハムレットの心情が語られる。

上方、舞台上と位置を変えながら観客に常に見せられている THEATER の文字。ラストの演出のカギを握った。　撮影：清水俊洋

■アンケートより■

・THEATER の文字が舞台上にずっと見えていて、役者たちが『ハムレット』の世界を生々しく演じる中で舞台上を俯瞰させられました。(20 代男性)
・今まで観たハムレットの中で一番台詞がはっきりしていて言葉がとても理解しやすく、聞き取りやすかった。言葉とリズムを情報としてしっかり聴くことができて良かった。(30 代男性)
・何百年も続いている作品なのに初めて見るような新鮮さに溢れていました。すばらしい。(30 代男性)

■研修生の活動■

本公演はインターン研修生たちにとって、ホワイエ業務を実践する初めての機会となった。実際にホワイエ業務用の制服を着用するところから始まり、チケット確認や、開演前の場内案内、そして公演中にお客様をご案内する際のドア開閉のやり方に至るまで、ホワイエでお客様と接する業務の一通りについて公演を通じて身につけていった。慣れない作業に悪戦苦闘しながらも、教わったことを共有しながら、インターン生活の中で繰り返し行うことになるホワイエ業務を基礎から学んだ。

■研修生ノート■

ホワイエ業務は今までの人生の中で体験したことのないものであったが、開演前・終演後のお客様と直接顔を合わせる機会を通じて、演劇の与えるものの大きさや劇場の役割について考えさせられた。普段観劇する際に訪れる劇場という場に、お客様を迎える側として立ってみると、視点が変わり新たな発見があった。
KUNIO 版の『ハムレット』は、原作が書かれてからの 400 年という月日を全く意識させない新鮮さを持っていた。ハムレットをはじめとして登場人物たちは“生”のエネルギーに満ち溢れ、現代的な衣裳をまとって各々の問題に奔走する様は、現代に生きる私たちと似通った部分を多く感じた。

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014

地点『コリオレイナス』

地点の『コリオレイナス』は、2012 年ロンドンオリンピック文化プログラム（カルチュラル・オリンピアード）「ワールド・シェイクスピア・フェスティバル」の一環として、ロンドン・グローブ座の依頼により制作された。シェイクスピアの全 37 作品を 37 の言語で上演するプロジェクト“GLOBE TO GLOBE”に日本代表として参加、その独特の演出と新鮮な解釈が高く評価された。本公演は、その『コリオレイナス』の初の東京公演である。

ホワイエには地点の活動を毎週伝えるチラシ「BEAT」を展示し、公演と合わせて多くのお客様にご覧いただいた。

■公演データ■

日時	2014 年 8 月 28 日（木）～ 8 月 31 日（日）
会場	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
入場料	一般：3,500 円　学生：2,500 円　豊島区民割引：3,000 円　障害者割引：2,000 円
来場者数	775 名
出演	出演：安部聡子、石田大、小河原康二、窪田史恵、河野早紀、小林洋平 演奏：桜井圭介、Norico
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画制作	地点
助成	平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■演出家プロフィール■

三浦　基（みうら　もとい）

地点代表、演出家。1973 年生まれ。桐朋学園芸術短期大学演劇科・専攻科卒業。1996 年、青年団（平田オリザ主宰）入団、演出部所属。1999 年より 2 年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在する。2001 年帰国、地点の活動を本格化。2005 年、京都へ拠点を移す。著書に『おもしろければ OK か？現代演劇考』（五柳書院）。2008 年度京都市芸術特別奨励者。2010 年度京都府文化賞奨励賞受賞。2011 年度京都市芸術文化新人賞受賞。

現在、京都造形芸術大学客員教授。

■アーティストプロフィール■

地点（ちてん）

多様なテクストを用いて、言葉や身体、光・音、時間などさまざまな要素が重層的に関係する演劇独自の表現を生み出すために活動している。劇作家が演出を兼ねることが多い日本の現代演劇において、演出家が演出業に専念するスタイルが独特。

2005 年、東京から京都へ移転。2006 年に『るつぼ』でカイロ国際実験演劇祭ベスト・セノグラフィー賞を受賞。2007 年より＜地点によるチェーホフ四大戯曲連続上演＞に取り組み、第三作『桜の園』では代表の三浦基が文化庁芸術祭新人賞を受賞した。チェーホフ 2 本立て作品をモスクワ・メイエルホリドセンターで上演、また、2012 年にはロンドン・グローブ座からの招聘で初のシェイクスピア作品を成功させるなど、海外公演も行う。2013 年、本拠地京都にアトリエ「アンダースロー」をオープン。

■公演中の様子■

6 人の俳優によって舞台は進行していく。

ユニークな衣裳や小道具。

撮影（上段 2 枚）：青木司

ホワイエには地点のチラシ「BEAT」を展示した。

■アンケートより■

・シェイクスピアであれ遠慮がないところが痛快。新しい演出をこれからも期待します。（40 代男性）

・ちょっと難しくてわたしにはよく分かりませんでした…パフォーマーの方々の集中力・緊張感は伝わってくるのですね…（30 代女性）

・少ない人数で何役もこなしていて、おもしろかったです。ぜひまたこのようなユニークなものをやってください。（20 代男性）

■研修生の活動■

地点の活動を伝えるチラシ「BEAT」の展示を行った。「BEAT」は地点の活動全般を伝えるために、写真と活動の様子を伝える文章を掲載したチラシを 40 週に渡り毎週作成・発行したものである。今回の公演では、「BEAT」の第 1 号から第 12 号までを劇場へ続く階段の壁に展示し、本公演以外の地点の活動も紹介した。また「BEAT」をたばねた冊子をホワイエのカフェテーブルに設置し、ゆっくりと内容を楽しんでもらえるよう工夫した。

公演中は、受付スタッフとしてお客様の対応にあたった。

■研修生ノート■

伝統あるロンドン・グローブ座の依頼により 2012 年に制作された本公演だが、「シェイクスピア劇」と聞いて連想するものとは違う斬新なものだった。抑揚をつけたセリフとダンスのような俳優の動きは独特で、ストーリーを追いかけて楽しむような演劇とは全く異なり、どこか日本風の舞台装置とデニム生地の衣装、虚無僧の笠やフランスパンといった小道具も新鮮に感じられた。観客に演劇の新しい魅力と可能性を伝える公演となったのではないだろうか。

本公演のアーティストである地点は、普段京都を拠点に活動している。日本各地、世界各国における地点の活動を伝えるチラシ「BEAT」の展示や冊子に熱心に目を通すお客様の姿が印象的だった。

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014

しぇいくすぴあ寄席

シェイクスピアの作品を、落語・講談・コントという、芝居とはひと味もふた味も違った日本伝統のスタイルで届けた公演である。若年層、シェイクスピア作品ファンの中で、これまで寄席に訪れるきっかけがなかった人が寄席に触れる機会となった。また普段演じられることが少ない演目を演じたことで、寄席ファンも多く来場した。

■公演データ■

日時	2014 年 9 月 23 日（火・祝）　14:00 開演
会場	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
入場料	一般：3,000 円　学生：1,000 円　豊島区民割引：2,500 円　障害者割引：2,000 円
来場者数	246 名
出演	古今亭志ん輔（落語）、一龍齋貞橘（講談）、だるま食堂（コント）
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画製作	あうるすぽっと
助成	平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■出演者プロフィール■

古今亭志ん輔（ここんてい　しんすけ）／落語

1953 年、東京生まれ。3 代目故古今亭志ん朝に師事、85 年に真打に昇進し「古今亭志ん輔」襲名。落語協会所属（理事）。2014 年で 15 周年を迎えたシェイクスピア作品を落語に翻案した落語会は照明・音響を使用するなど演劇的な演出を試み、“古典の名品の血が通った新感覚の落語”と高く評されている。 また、NHK『おかあさんといっしょ』(82 年～99 年)、新日本フィルハーモニー交響楽団のファミリーコンサート出演（00 年～）など落語以外の活動も多彩。

一龍齋貞橘（いちりゅうさい　ていきつ）／講談

1979 年、東京都生まれ。2000 年、一龍齋貞水に入門。同年 7 月 24 日、日本橋亭（中央区日本橋）にて初高座。2006 年 10 月、二ツ目昇進。13 年春、真打昇進。お江戸日本橋亭等、都内演芸場に出演。「新鋭講談会」や、毎月開催の「貞橘勉強会」等、活躍著しい注目の若手講談師。講談教室や司会、はとバスの史跡ツアーなどへも活躍の場を拡げている。講談協会所属。

だるま食堂（だるましょくどう）／コント

女性三人のコントグループ。1980 年代後半から 90 年代前半まで、舞台・TV・CM 等で活躍。 しばしの充電期間を経て、2000 年より、活動再開。パワフルかつエキサイティングなコントをモットーに活動中。NHK『笑いがいちばん』、日本テレビ『笑点』『エンタの神様』、ＣＭ『平禄寿司』、映画『さわこの恋上手な嘘の恋愛講座』。平成 17 年度国立演芸場花形演芸会審査員特別賞。

■公演中の様子■

第一部　講談　ジュリアス・シーザー

第二部　コント　しぇいくすぴあ

第三部　落語　八丁櫓（シンベリン翻案）

撮影：久塚真央

■アンケートより■

・シェイクスピアの面白さがあらためてわかったような気がしました。（50 代男性）
・落語は全くの初めてでしたが楽しめました。昔の人はこんな感じの翻案からシェイクスピアを聞いていたのかなと想像して楽しむと同時に、今でもこんなに楽しめるんだと新発見でした。（30 代女性）
・寄席だから、目の不自由な方にも楽しんでもらえるということで、配慮がなされており、心ある優しい対応に感激しました。盲導犬の姿を見ただけで、「今日は遠くからやってきた甲斐があった」とほっとしました。（60 歳以上男性）

■研修生の活動■

本公演は、「視覚障害者お出かけ支援講座」と連動した企画であり、目の見えない人にも公演を知ってもらうため、点字 DM を作成し送付した。本番では、ホワイエでの仕事が中心で、その際、盲導犬を連れた方や白杖を持つ方、介助者とともに歩いている方がたくさん来ているのを目にした。視覚障害者の方は、普段使用していない廊下脇の扉を使用したため、チケットを事前にカウンターで確認するなど、不規則なこともあったが、特に大きな混乱はなかった。「視覚障害者お出かけ支援講座」の介助ボランティアの助けもあり、普段とほぼ変わりなくホワイエでの業務を行うことができた。少しの助けや建物そのもののバリアフリー化によって、劇場は誰でも訪れることができ、楽しめる場所になることを改めて感じながら活動した。

■研修生ノート■

本公演は 3 部に分かれているが、どの部でもシェイクスピアと寄席の良さを同時に体感することができた。まず、講談では『ジュリアス・シーザー』が語られた。シーザーがブルータスに刺される有名なシーンを講談独特の語りで聞けたことは、英語劇しか見たことのない私にとって新鮮であった。続くコントは、高校時代の恩師の葬式への参列がシチュエーションであり、観客を巻き込みながら進んでいった。作品そのもののアレンジではなくシェイクスピアを敬愛する恩師との思い出を再現するというものであったが、随所にシェイクスピアに関するネタが盛り込まれ、面白おかしい時間であった。最後は『シンベリン』翻案の落語「八丁櫓」であった。語りの力を強く感じたと同時に、シェイクスピア作品が誕生から約 400 年たった現代で、日本の伝統のひとつである落語と融合し、劇場という場から届けられていることに深い感慨を覚えた。

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014

ロミオとジュリエットのこどもたち

ロロ主宰・新進気鋭の若手演出家として注目を浴びる三浦直之が、音楽に□□□・三浦康嗣と、 主演に女優としても活動するボーカリスト後藤まりこを迎え、シェイクスピアに初挑戦した作品。作品の前半は『ロミオとジュリエット』の抜粋を上演し、後半は『ロミオとジュリエット』をもとに「永遠のボーイ・ミーツ・ガール・ストーリー」のオリジナル作品を上演した。

■公演データ■

日時	2014 年 10 月　2 日（木）～ 5 日（日）
会場	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
入場料	一般：3,500 円　豊島区割引：3,000 円　学生：2,500 円　障害者割引：2,000 円 ロミジュリ割引（ペア券）：6,000 円
来場者数	1,027 名
脚本・演出	三浦直之（ロロ）
音楽	三浦康嗣（□□□）
出演	後藤まりこ、永井秀樹、長田奈麻、日髙啓介、伊東沙保、田中佑弥、北村 恵、 重岡 漠、島田桃子、板橋駿谷、亀島一徳、篠崎大悟、望月綾乃
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画制作	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
助成	平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■脚本・演出家プロフィール■

三浦　直之（みうら　なおゆき）

1987 年 10 月 29 日生まれ宮城県出身。2009 年、処女作「家族のこと、その他たくさんのこと」が王子小劇場「筆に覚えあり戯曲募集」を史上初受賞。同年、主宰としてロロを立ち上げ、以降全作品の脚本・演出を担当。幼少より接種した漫画・アニメ・小説・音楽・映画などのカルチャーを縦横矛盾に紡ぎ合わせ、あらゆる出会いの瞬間を物語化する。2013 年、脚本・初監督映画「ダンスナンバー　時をかける少女」が MOOSIC LAB 2013 準グランプリ受賞。ロロ以外での演出・脚本提供や東京カランコロン「恋のマシンガン」MV& ショートフィルム(脚本:中島庸介)監督、TV ドラマ「ドラゴン青年団」第 7 話の脚本提供など演劇の枠を拡張する活動をしている。

■作曲家プロフィール■

三浦康嗣（みうら　こうし）

作詞、作曲、編曲、プロデュース、エディット、音響エンジニアリング…等々を一人でこなし多角的に創作に関わる総合作家。□□□(クチロロ)主宰。スカイツリー合唱団主宰。平井堅、m-flo、RYO the SKYWALKER、土屋アンナ、野宮真貴、bird、坂本美雨、MEG、環 ROY、私立恵比寿中学等様々なアーティストの楽曲、プロデュース、リミックスや様々な CM 音楽、2013 年のカンヌ広告祭サイバー部門銀賞受賞、2014 年の D&AD イエローペンシル受賞した『TOKYO CITY SYMPHONY』の音楽監督、岸田戯曲賞受賞作『わが星』の音楽担当、「音楽劇ファンファーレ」の音楽・演出等々。RISING SUN ROCK FESTIVAL 等の大型音楽フェスや Low End Theory 等のクラブイベント、吾妻橋ダンスクロッシング等の舞台/ダンス/美術/演劇的イベントまで幅広く活動している。

■公演中の様子■

ロミオ(亀島一徳)とジュリエット(後藤まりこ)。

撮影：青木司

■アンケートより■

・とてもステキな舞台をありがとうございました。舞台美術、照明、音楽、衣裳にいたるまで本当に素晴らしかったです。(20 代男性)

・シェイクスピアの原作ながら、非常に現代的で大胆な翻案が面白かった。演出もほどよく前衛的、ほどよく古典的でとても楽しめた。(20 代男性)

・非日常の時間を体感できました。音、話共に実験的でおもしろかった。(30 代男性)

■研修生の活動■

本公演では、受付業務や楽屋の裏方の仕事を行った。また、稽古場の組み立てや解体のサポートもした。楽屋の裏方の仕事は、今回初めて行ったことで、ケータリングの準備が主な仕事であった。楽屋ということで、より俳優との距離が近く、受付業務や舞台を観劇することのみでは伝わらない俳優の思いや意気込みを感じることができ、とても良い経験になった。

また、俳優の稽古前の事前ワークショップや稽古、ゲネプロの様子も見学もした。

■研修生ノート■

本公演は、稽古前のワークショップから稽古、公演と芝居をつくる過程に触れることができ、インターン研修生にとって演劇をより身近に感じられるものとなった。事前ワークショップでは、脚本の構成をお聞きしたり、テキレジの作業の様子を見たりすることができ、演劇をゼロから創り出していく場に存在することができたことに興奮し、貴重な経験となった。また、稽古やゲネプロの見学も活気のある現場に多くの刺激を受けた。本公演後には初めて大入り袋をもらい、演劇の独自の文化を感じることができた。本公演での経験は、今後演劇の仕事に関わっていくインターンや関わらないものにとっても、かけがえのないものになると思う。

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014
あうるすぽっと+毛皮族 共同プロデュース

じゃじゃ馬ならし

シェイクスピアの喜劇『じゃじゃ馬ならし』を上演した。本作品は、あうるすぽっとと演出家江本純子率いる劇団「毛皮族」が共同で制作した。鳥居みゆきや柄本時生ら個性あふれる俳優陣を起用。個性的な衣裳や舞台セット、オリジナルシーンの挿入などで、原作とは一味違った『じゃじゃ馬ならし』を演出。観客にあらたな解釈の仕方を考えさせるような作品となった。

■公演データ■

日時	2014 年 11 月 20 日（木）～24 日（月・振）
会場	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
入場料	一般：3,500 円　学生：2,500 円　豊島区民割引：3,000 円　障害者割引：2,000 円
来場者数	1,589 名
脚色・演出	江本純子
出演	鳥居みゆき、柄本時生、柿丸美智恵、市川しんぺー、佐久間麻由、柴田鷹雄、佐藤永典、寺十吾、羽鳥名美子、髙田郁恵、金子清文、高野ゆらこ、玉置孝匡、鈴木晋介、江本純子
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画制作	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）、毛皮族
助成	平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■演出家プロフィール■

江本　純子（えもと　じゅんこ）

1978 年千葉県生まれ。劇作家・演出家・俳優。立教大学在学中の 2000 年 9 月、劇団「毛皮族」を旗揚げし、演劇活動を始める。09 年より、毛皮族とは異なる作風と上演形態にて劇作品を発表するための場として「財団、江本純子」の活動を開始する。06 年、処女小説『股間』を発表。09 年『セクシードライバー』、10 年『小さな恋のエロジー』が岸田國士戯曲賞最終候補作となる。12 年、フランス・パリ日本文化会館より招聘を受け、同劇場にて『女と報酬（Le fric et les femmes）』を上演する。08 年～13 年、セゾン・ジュニアフェローとしてセゾン文化財団からの助成を受ける。近年の演出作に『ライチ☆光クラブ』等。

■公演中の様子■

じゃじゃ馬ことキャタリーナ（鳥居みゆき・右）と
妹ビアンカ（柿丸美智恵・左）。

じゃじゃ馬の前に現れたペトルーチオ（柄本時生）。

演出家（江本純子・左）自ら舞台に。
ヴィンセンショー（鈴木晋介・中央）、
　　グルーミオ（佐久間麻由・右）。　撮影：青木司

■アンケートより■

・なかなか珍しいものだと思います。面白い、つまらないというよりどうしてこういう演出なのだろうとそっちの方が気になりました。（50 代女性）
・江本さんらしい面白い作品。役者さんもそれぞれ役にはまっていた。（40 代男性）
・異空間に引き込まれました。予想外の展開にとても新鮮でした。テンポもよかったです。楽しみました。愛について考えます。（60 歳以上女性）

■研修生の活動■

小道具である偽札作りを担当した。小道具と言ってもやはり作品の一部。丁寧に心をこめて作成する大切さを学んだ。劇場入りの日は、搬入作業、楽屋セッティングの手伝いをした。舞台稽古中は必要に応じて弁当の買い出しなど制作の方から頼まれた仕事を行った。また、販売用ポストカードの看板も作成した。当日は受付やチケットの確認などを手伝った。

■研修生ノート■

演出家はもちろんのこと、スタッフに占める女性の割合が多く、舞台裏では女性の強さを感じた。『じゃじゃ馬ならし』の原作を読んではいたものの、本作品は、それとは一味も二味も違った脚色・演出が新鮮だった。アンケートにも見られたが、私自身も「これは何だろう、どんな意味が込められているのだろうか」などと問いかけながら観劇した。『じゃじゃ馬ならし』という作品そのものだけではなく、劇作品と観客の関係、演劇の本質的な面白さについても考えさせられた公演だった。

あうるすぽっと×アンスティテュ・フランセ東京

インサイド・ナイト

ジャン＝バティスト・アンドレのデビュー作である「インサイド・ナイト」は、「ヌーヴォー・シルク」と呼ばれる「ダンス、演劇、映像などの要素を融合させた、現在、ヨーロッパで注目を集める新しい形のサーカス」である。本公演は、海外アーティストによる新しく良質な作品に触れる機会を大人・子ども双方に提供し、新たな芸術との触れ合いを楽しんでもらうことを目的としたものである。「子どもが劇場に訪れるきっかけの提供」、「子どもも楽しめる作品」を目指し、子ども料金を無料とした。

■公演データ■

日時	2014 年 11 月 28 日（金）　19:00 開演 29 日（土）　14:00 開演 30 日（日）　14:00 開演
会場	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
入場料	全席自由　一　般：3,000 円　大学生・専門学生：2,500 円 中高生：1,500 円　子ども（小学生以下、2 歳以上）：無料（要予約） 豊島区民割引：2,000 円　障害者割引：1,500 円
来場者数	279 名
構想・演出・出演	ジャン＝バティスト・アンドレ
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
共催	アンスティテュ・フランセ東京
助成	平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■アーティストプロフィール■

ジャン＝バティスト・アンドレ　Jean-Baptiste Andre

数年間の体操トレーニングと競技生活を経てサーカスアートと出会い、演劇とダンスの世界に目覚める。2002 年、シャロン＝アン＝シャンパーニュ国立サーカス芸術センターを卒業。同年、コンテンポラリーサーカスを中心としたプロジェクト実現のため、アソシアシオンW(ドゥブルヴェ)を設立。『Interieur Nuit (インサイド・ナイト)』(2004 年)、『Comme en plein jour』(2006 年)の 2 つのソロ作品を発表。4 つの小品からなるレパートリー作品『Modules』と共にフランス国内外で上演。ダンサーとして、これまでに振付家のフィリップ・ドゥクフレ、クリスチャン・リゾ、エルマン・ディエフュイス、フランソワ・ヴェレ、ラシッド・ウランダンらの作品に参加している。

■公演中の様子■

映像と影を用いたパフォーマンス。

無言の上演の中、アンドレ氏の表情が多くを語る。
撮影：久塚真央

からだであそぶワークショップ

■開催データ■

日時	2014 年 11 月 29 日（土） 9:30～11:00
講師	ジャン＝バティスト・アンドレ
対象	8～12 歳

腕を大きく広げる簡単な動きから逆立ちなど難易度の高い動きにも挑戦していた。子どもたちの笑顔が絶えない楽しいワークショップとなった。

撮影：久塚真央

■アンケートより■

・ずっと見ていると、どんな内容かが分かってきて、とてもおもしろかったです！　かげがうつっていたはじめのころは、おもしろすぎて声に出して笑ってしまいました。（女性）
・とてもおもしろかったです。足と手の動きが好きでした。（9 歳男性）
・映像のところで頭がグラグラしました。すごい錯覚、トリッキー。（40 代男性）
・いちばん最初はびっくりしたけれど、とてもおもしろかったしすごかった。わたしもできたらいいなと思います。（女性）

■研修生の活動■

本番が始まってからは、ホワイエでの業務を担当した。子どもに海外のハイクオリティの作品を気軽に見る機会を提供するという企画であり、実際小さな子どもたちがたくさん訪れてた。開演前は、ホワイエに展示してある作品・シェイクスピア城で遊びまわったりと、にぎやかな雰囲気であった。本番中は見学のため場内にいたが、時々子どもを抱えて外に出られるお客様がいらしたが何もできず、ペンライトなど補助ができる準備をすればよかったと反省した。初日の夜には関係者によるレセプションに参加した。ホワイエにフランス語が飛び交うという珍しい光景であった。アンスティテュ・フランセの方とお話しする機会を得られたという有意義な時間であった。

■研修生ノート■

インターン研修生にとっても、「ヌーヴォー・シルク」という新しい芸術に触れることのできた貴重な公演であった。劇場という場所、海外のアーティスト、新しい芸術と、子どもにとってだけでなく、大人にとっても新しい価値観を提供した公演だったのではないかと思う。公演内容は、アーティストの身体能力が発揮されつつ、抽象的で独創的な、今までに見たことのない世界を表現しているものであった。難しい公演であったが、アンケートに感想を書く子どももたくさんいた。子どもの目線で見ると「おもしろさ」というものを強く感じるということが印象的だった。一方、「難しかった」「分からなかった」という意見があったのも事実である。単純明快ではない芸術を観客が「難しかった」という感想で終わらせることがないよう、「難しさを楽しんでもらう」「『難しい』の先を見てもらう」ところまで観客を導くことが、今後、自分が芸術と観客の橋渡しをする立場に立つときの課題だと感じた。

あうるすぽっと×fabien prioville dance company 共同制作

SOMA プロジェクト『出演者募集 Audition』

SOMA プロジェクトとは、あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）とピナ・バウシュヴッパタール舞踊団等で活躍したファビアン・プリオヴィル(fabien prioville dance company) が共同で行う新作公演にむけてのプロジェクトである。コンセプトは「“ピナ・バウシュのダンサー”と“日本のアーティスト”、二つの世界のコラボレーション」。公演は 2015 年 8 月末から、あうるすぽっととドイツで開催される。このコラボレーションを実現するため、ピナのダンサーと日本のアーティストはお互いの家にレジデンスし、稽古の中だけでなく生活の中で、互いに刺激的な発見をし合う。そしてパフォーマーの一人一人が自身の価値観と芸術に対する信念を見つめ直しながら制作していく。

今回、このようなプロジェクトに参加を希望する日本のアーティストを募集し、オーディションを行った。ダンサーだけではなく、俳優、音楽アーティスト等、様々なジャンルのアーティストからの応募があった。一週間にわたるオーディションではそれぞれのパフォーマンスだけではなく、ファビアン氏が提示した課題に対し、ほかの参加者と共同で制作する能力も重要な審査対象となった。最終的に 8 名のアーティストが選抜された。

■開催データ■

日時	2015 年 1 月 19 日（月）～25 日（日）
会場	あうるすぽっと　劇場・会議室
対象	SOMA プロジェクト出演希望者
応募者数	215 名
ディレクション	ファビアン・プリオヴィル
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区、 fabien prioville dance company

■アーティストプロフィール■

ファビアン・プリオヴィル　Fabien Prioville

アンジェ（フランス）国立振付センター（CNDC）にて学ぶ。エドゥワール・ロックのラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス（カナダ）、フィリップ・ブランシャール（ストックホルム）でダンサーとして活躍。1999 年ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団に入団。2006 年退団後はフリーで活動、振付家としてもジョセフ・ナジ（Josef Nadj）、デイビス・フリーマン（Davis Freeman）ら多数のアーティストと作品を創作。ニューヨークのジュリアード・スクールや日本、オーストラリアでも作品を発表。2010 年自身のカンパニーを立ち上げ、これまでに 5 作品を発表。最新作のデュエット”time for us”ではタンツテアター・ヴッパタール・ピナ・バウシュのメンバーでもある妻・瀬山亜津咲と共演した。

■オーディションの様子■

応募者で埋め尽くされた舞台。

参加者のパフォーマンスに熱いまなざしを向ける。

フィードバックをしながら振付を指導。

撮影：久塚真央

■研修生の活動■

様々なジャンルの人に応募していただくように、チラシ・DM の送付先を考えた。また、オーディション参加者全員分のゼッケンを作成した。参加者がパフォーマンスしやすい最適なゼッケンを考え作成することは予想外に難しかった。当日は参加者がスムーズにオーディションに臨めるよう、コースの希望に合わせて対応したり、ゼッケンを間違いなく渡すことに集中した。オーディションは一週間にわたって行われ、少しずつ人数が絞られていく形式であったため、落選者の対応には気をつかった。また翌日の受付準備なども臨機応変に行なった。

■研修生ノート■

ピナ・バウシュが実際に行っていたような方式の稽古をオーディションを通して見られたことはインターン生として貴重な経験だった。人間の内部から舞台芸術が生まれていくような瞬間の連続だった。日本で一般的に想像されるオーディションとは違い、参加者に対して、フィードバックをしながら進められていた。ただ合否が決まるというだけではなく、貴重なアドバイスやコメントをもらうという意味で、参加アーティストにとっても学びの場となっていた。ファビアンがオーディション中、選ぶのが本当に難しいと繰り返していたように、様々なジャンルのアーティストが集まり、それぞれに惹きつけるパフォーマンスをしていた。日本の芸術界の未来に期待しつつ、このようにアーティストを発掘する今回の様な企画はこれからも必要ではないかと、多くの才能の前に思った。

Ⅱ. 教育普及事業

公立学校アウトリーチ

文京高校コミュニケーション能力向上プログラム

都立文京高校 1 年生の生徒を対象とした、コミュニケーション能力向上のためのワークショップ。コーディネーターに東京学芸大学の高尾隆を迎え、“インプロ(即興演劇)”のメソッドを活かして、生徒たちのコミュニケーション能力を引き出すゲームを行った。

■開催データ■

日時	2014 年 6 月 18 日（水）13:00～14:00、14:10～15:10 25 日（水）13:00～14:00、14:10～15:10
会場	都立文京高校体育館
対象	都立文京高校の 1 年生
参加者数	320 名
講師	高尾隆、即興実験学校
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）
企画制作	あうるすぽっと
助成	平成 26 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

■講師プロフィール■

撮影：栗原大輔

高尾　隆（たかお　たかし）

東京学芸大学芸術・スポーツ科学系音楽・演劇講座演劇分野准教授。1974 年島根県松江市生まれ。1998 年東京大学文学部卒業。2004 年一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士（社会学）。専門は演劇教育、インプロ（即興演劇）。現在は大学での授業の他、杉並区の公共劇場「座・高円寺」など、学校、劇場、企業、地域、福祉施設などにおいてインプロ・ワークショップをおこなっている。著書に『インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか？』『インプロする組織』（共著）『学校という劇場から』（共著）『ドラマ教育入門』（共著）『クリエイティヴ・アクション』（共著）など。インプログループ「即興実験学校」ではワークショップをおこなうかたわら、舞台にも立っている。

即興実験学校（そっきょうじっけんがっこう）

高尾隆が 2001 年 9 月に設立。2002 年 1 月より、中込裕美（旧姓：藤野）との共同主催に。
「Give your partner a good time.（相手に良い時間を与えよう。）」をモットーに、インプロの創始者、Keith Johnstone に師事したスタイルのインプロを行なっている。

■ワークショップ内容■

「がんばらない」というインプロのルールについて説明を受ける生徒の皆さん。

体を使ったゲームも多く行った。

全員で息を合わせて行うゲーム。

撮影：涌井直志

■アンケートより■

・色々なゲームをして楽しかった。失敗を笑いにかえることができると知りました。いい経験になった。（男性）
・「がんばらない」って言葉は何ごとにも応用できると思った。肩の力を抜くことが大切だとわかった。最初は恥ずかしかったけど、だんだん楽しくできた。（女性）
・普段話さない人とたくさん話せてよかった。コミュニケーションをとるのは苦手だけど、できて楽しかった。もう一回やってみたい。（女性）

■研修生の活動■

ワークショップ前日に、記録用機材の準備を行った。当日は記録用機材の運搬、会場設営、ワークショップ中の写真・ビデオ撮影、内容の記録を行った。ワークショップ終了後には講師の振り返りミーティングに同席し、ワークショップの評価について学んだ。

■研修生ノート■

生徒の皆さんは、初めて体験するインプロにはじめは戸惑う様子も見受けられたが、徐々に笑い声が増え楽しそうに取り組んでいた。普段話すことの少ないクラスメイトとゲームを通して触れ合うなど、教室とは違うコミュニケーションの場が生まれていた。「がんばらない」「失敗をポジティブに捉える」といったインプロの考え方を通じて、新しい視点からコミュニケーションについて考えることができたのではないだろうか。即興実験学校の皆さんによるインプロ実演は新鮮に映ったようで、途中で拍手や笑い声が起こったことが印象的だった。「あうるすぽっとを知らない」「劇場に行ったことがない」という生徒が多かった中で、演劇や劇場という文化に親しむ機会ともなったと思う。

舞台技術・制作講座

「舞台技術の基礎講座」「舞台制作の基礎知識」

「舞台技術の基礎講座」
　制作担当者、俳優、演出家などの舞台技術の専門知識を学んでいない方々に向けて、稽古場や劇場でスタッフと円滑なコミュニケーションを取るために必要な舞台ならではの用語や備品、劇場に入ってからのスタッフの動きなどの舞台技術に関する基礎的な知識を学ぶ講座。
「舞台制作の基礎知識」
　劇場に入ってからの制作担当者の動きを、仕込みから当日受付までの基本的な流れを学び、実例を交えながら紹介。制作担当者が気をつけるべき点を紹介した講座。

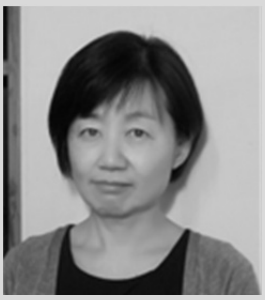
■開催データ■

日時	「舞台技術の基礎講座」　2014 年 7 月 17 日（木）19：00～21：00 「舞台制作の基礎知識」　18 日（金）19：00～21：00
会場	あうるすぽっと　会議室
参加費	無料
参加者数	「舞台技術の基礎講座」28 名、「舞台制作の基礎知識」23 名
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
助成	一般財団法人地域創造 平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■講師プロフィール■

松本　仁志（まつもと　ひとし）

日本電子工学院芸術学部ホールイベントコース卒業。1978 年、劇団 GMG を創立。舞台監督の専修定雄氏を師事。専修氏の下で、美輪明宏氏の「毛皮のマリー」「卒塔婆小町」等、風間杜夫氏の「黒い花びら」、日本オペレッタ協会の作品に参加。後に、フリーの舞台監督になり、劇団 ONLY クライマックス、劇団一跡二跳、アトリエダンカンの「鴨川ホルモー」、トムプロジェクトの作品に参加。水谷龍二作、風間杜夫一人芝居「旅の空」「カラオケマン」等、東憲司氏、ふたくちつよし氏、中津留章仁氏の作品に関わり現在に至る。2002 年から日本吟剣詩舞振興会の武道館大会に関わる。



飯田　亜弓（いいだ　あゆみ）

1995 年有限会社ぷれいす設立 。舞台公演の企画制作運営を主に活動。また、世田谷パブリックシアター、座・高円寺、松本市民芸術館などの票券管理運営にも携わる。最近の主な制作担当公演に、鈴置洋孝プロデュース「煙が目にしみる」「見果てぬ夢」「デイ・ドリーム・ビリーバー」「ソウルマン」座・高円寺春の劇場「詩人の家」、票券として NODA・MAP、地人会新社、二兎社、劇団ワンツーワークスなど多数。2010 年より台東区主催の「したまち演劇祭 in 台東」企画運営プロデューサー。

■講座内容■

［舞台技術の基礎講座］

劇場に入ってからの流れについてのタイムテーブルを使用しながら説明。その他、消防署に提出する禁止行為解除の申請について、申請書の記載の仕方など含めて講義された。

［舞台制作の基礎知識］

劇場に入ってから終演までを中心に小規模劇場での公演を想定した制作担当者の実務の流れについてや、「円滑に公演するためのヒントを見つける」という点について講義された。

■アンケートより■

□舞台技術講座

・普段、舞台監督さんや制作さんのお仕事を自分たち役者の中でやっているので、なかなか専門的な事がわからず、すごく貴重なお話でした。是非またお願いします。（20 代女性）

□舞台制作講座

・全体の流れやポイントなどすごく分かりやすかったです。今回は劇場入りからの動きについてでしたが、劇場入り前までの動きとしてのポイントなども教えていただけたら良かったかなと思います。（20 代女性）

■研修生の活動■

講座当日は両日ともに開始の 45 分程度前から、配布書類をもって受付で待機した。講座を一緒に受講し、舞台技術・舞台制作の新たな知識、現場での実際について学ぶことができた。終了後、アンケートの回収と会議室内の机の現状復帰を行った。

■研修生ノート■

「舞台技術の基礎講座」、「舞台制作の基礎知識」の両講座とも、参加者の皆様がとても積極的であった。講座終了後、質問をされている方が多くいたことが印象的であった。

私自身、舞台に関する知識が乏しいので、とても勉強になった。実際に、現場で働く方のお話は、具体的でとても臨場感にあふれていた。舞台技術、舞台制作の仕事は共に、周囲への細かい配慮が大切であると感じた。

近藤良平・コンドルズ、池袋大作戦！！池袋の街で大盆踊り大会

‘にゅ～盆踊り’大会 2014

‘にゅ～盆踊り’は、圧倒的人気を博する男性だけのダンスカンパニー‘コンドルズ’の主宰で、豊島区在住の振付家・ダンサーの近藤良平が創作した‘にゅ～’なオリジナル盆踊りである。池袋西口公園でのにゅ～盆踊り大会は、2009 年より開催し、今年で六回目を迎える。池袋の街を盛り上げるイベントとして、浸透しつつある。

大会前には、九か所で事前ワークショップを行い、盆踊りリーダーとなる‘しゃ～隊’ににゅ～盆踊りを伝授した。当日は台風直撃の予報で大会が開催できるかもわからない状況であった。ところどころ雨が降る場面もあったが、無事開催された。また当日の様子は、ニコニコ動画で生放送を配信した。

■開催データ■

日時	ワークショップ　　2014 年　8 月　4 日（月）～ 9 日（土） にゅ～盆踊り大会　　10 日（日）
出演	近藤良平、コンドルズ
主催	公益財団法人としま未来文化財団、豊島区
企画・制作	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）
共催	東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
協力	ROCKSTAR／東京商工会議所豊島支部／池袋西口商店街連合会／（株）シグマコミュニケーションズ／西川也寸志／豊島区立勤労福祉会館／南大塚地域文化創造館／駒込地域文化創造館／巣鴨地域文化創造館／雑司が谷地域文化創造館／千早地域文化創造館／こまのや／甘美屋／駿河屋／鳥元本店／海畑／Tam Golfer’s Club/東明飯店
助成	平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■アーティストプロフィール■

近藤　良平（こんどう　りょうへい）

コンドルズ主宰・振付家。コンドルズとは男性のみ学ラン姿でダンス、生演奏、人形劇、映像、コントを展開するダンスカンパニー。30 ヵ国以上で公演。ニューヨークタイムズ紙絶賛。渋谷公会堂公演も即完超満員。

NHK 総合『サラリーマン NEO』内「サラリーマン体操」、NHK 教育『からだであそぼ』内「こんどうさんちのたいそう」、『あさだ！からだ！』内「こんどうさんとたいそう」、NHK 連続テレビ小説『てっぱん』オープニング、NODAMAP『パイパー』に振付出演。櫻井翔主演、三池崇史監督『ヤッターマン』の振付担当。朝日舞台芸術賞寺山修司賞受賞。TBS『情熱大陸』、映画『ブタがいた教室』、サントリーボス「シルキーブラック」TVCM 出演。2013 年秋の東京国体では開会式典の総合演出を担当。横浜国立大学、立教大学などで非常勤講師としてダンスの指導もしている。現在、豊島区在住。

ワークショップ

それぞれの会場ごとに参加者を募り、大会当日に盆踊りリーダーとなる‘しゃ～隊’育成のために行うワークショップである。コンドルズが直々に‘にゅ～盆踊り’を伝授した。大会直前には全会場の‘しゃ～隊’が勤労福祉会館で初めて顔を合わせ、全員で踊ることで気持ちを高め、本番に備えた。

■開催データ■

日時/場所	2014 年　8 月 4 日（月）19:00～21:00　千早地域文化創造館 5 日（火）19:00～21:00　南大塚地域文化創造館 6 日（水）19:00～21:00　駒込地域文化創造館 7 日（木）19:00～21:00　勤労福祉会館 8 日（金）14:00～16:00　東京芸術劇場 19:00～21:00　あうるすぽっと 9 日（土）10:00～12:00　雑司が谷地域文化創造館 14:00～16:00　巣鴨地域文化創造館
対象	年齢・経験不問 ワークショップ 1 会場と 8 月 10 日の両日参加できる方
参加費	ワークショップ一般：1,000 円 ※豊島区在住 65 歳以上は無料　（おとなのアカデミー実施事業） 豊島区割引（在勤・在学・在住）：500 円（要証明書提示）
参加者数	114 名
講師	近藤良平、鎌倉道彦、山本光二郎、安田有吾、スズキ拓朗、香取直登

※「おとなのアカデミー」とは…

あうるすぽっとでは、高齢者の方に豊かで生き生きとした暮らしをサポートする劇場を目指し、文化芸術に触れる機会を提案している。舞台芸術の鑑賞のみならずワークショップやレクチャーなど体験型プログラムを提案し、かつ参加しやすい機会を設けることで、新たな関心や意欲を呼び起こし、地域に心ゆたかな暮しを普及していくことを目指している。

■ワークショップ内容■

- 1 人ずつ名前を呼びながら出欠確認
- 2 人 1 組になってストレッチ
- 音楽を流しながらウォーミングアップ
- 円になって隣の人と手拍子をしながらリズム練習
- 掛け声の練習
- ‘にゅ～盆踊り’の練習
- うちわ遊びで休憩
- ロック調‘にゅ～盆踊り’シャバラの練習
- 崎陽軒「シウマイ旅情」の練習

ストレッチの様子。

‘にゅ～盆踊り’を習得中。

2 重の円での振りにより、ペアが次々入れ替わり、自然と初対面の人とコミュニケーションをとることができる。

■アンケートより■

・日常のつかれやモヤモヤやイライラが汗とともに吹っ飛んでいきました！！（30 代女性）
・今回三回目の参加です。ワークショップに参加できるよう元気に過ごしたいと考えています。（60 代女性）
・たのしかった！ほんばんがんばります！（女性）
・毎年これがないと「夏」じゃありません！！（50 代女性）
・台風を吹き飛ばすつもりでがんばるぞー！！（20 代男性）

■研修生の活動■

インターン最初の大きな仕事が、自転車に乗って掲示板を回ることで、驚いた覚えがある。やはり季節上、気温は大変暑く、また豊島区は坂道が多く、毎日日焼け止めクリーム必須で汗を流しながら自転車に乗った。チラシを貼っていると、街の人に話しかけられたり、自分の働く豊島区の地形について少しは理解できたりしたので、今となっては最初の仕事がこれでよかったと感じる。ワークショップでは、実際に参加することで、参加者やコンドルズの皆様と触れ合い、にゅ～盆踊りの楽しさを経験できた。

■研修生ノート■

今年が 6 回目の開催となる。初めての参加の方ももちろんいるが、リピーターも多い。盆踊りをつくり劇場で披露した年を含め、7 年連続で参加している方もいた。それほど池袋の夏に根付くイベントに成長しているということであろう。10 歳以下から 60 代まで幅広い世代が参加していた。コンドルズが参加者の様子を見つつ、和やかな雰囲気を作りながらのワークショップであったため、初対面にもかかわらず、お互いにコミュニケーションをとりながら、楽しく振りを練習できている様子がうかがえた。しゃ一隊は周りの人を巻き込む役目があるのだということを一人一人が心に留めることができたはずだ。

‘にゅ～盆踊り’大会 2014

大型の台風 11 号が直撃との情報があったが、決行した。雲行きは怪しくも、池袋西口公園に櫓、特設ステージが組まれ、浴衣の人が集まり、祭りの雰囲気となった。コンドルズとしゃ～隊が中心となり、通りすがりの人々も巻き込みながら、盆踊り大会は開始された。途中、突然の豪雨にも見舞われ、東京芸術劇場へ避難するという場面もあったが、二十分ほどで小雨となり、大会は再開した。開催すら危ぶまれた‘にゅ～盆踊り大会’であったが、最後には四重の円になるほどの参加者が集まり、盛り上がった。例年に比べると少ない来場者数ではあったが、人々にとって非常に印象的な一日となったであろう。

■開催データ■

日時	2014 年　8 月 10 日（日）17:00～20:00
会場	池袋西口公園
来場者数	3,000 人
出演	コンドルズ、プロジェクト大山、和服散歩の会・知紫会

■内容■

櫓の上で祭りを盛り上げるコンドルズ。

和服散歩の会・知紫会。

プロジェクト大山。

会場限定のうちわを持って盛り上がる来場者。

最終的には 4 重の円に。

撮影：涌井直志

■研修生の活動■

研修生は、主に会場の準備とうちわの配布を行なった。うちわを配りながら、来場者数をカウントし、会場の周りにいる人々を大会へ巻き込んでいった。その過程で、多くの人に開催するの？と驚かれることが多かった。初めは半信半疑でも、櫓の周りの円に入り、にゅ～盆踊りを踊っているうちに、人々の顔が楽しそうになっていく様子が見てとれ、うちわを配り終えたら円に入って私も踊るのだ、と決めていた。結局円には入ることは出来なかったが、多くの人とコミュニケーションをとりながら、この大会がこの地域をひとつにし、温かく和やかな雰囲気にしているということを身をもって感じ取れた。

■研修生ノート■

本番では男も女も老いも若いも、そして外国人までが円に参加していた。しゃ～隊によって巻き込まれた人々も多くいた。また、ペアの振りがあることで、知らない人同士手を合わせているにもかかわらず、それを感じさせないくらい、参加者はみな常に笑顔であった。芸術は重要なコミュニケーションツールとなるのだ。悪天候であったが、開催と決まると、浴衣を着た参加者が続々と集まり、皆楽しみにこの日を待っていたのだと感じた。参加者の明るく力強いパワーが、台風に勝った結果であろう。にゅ～盆踊りは豊島区の夏の風物詩として認識されつつある。人々と文化が集うイベントとして、この先も続いてほしい。

あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014

ホワイエ展示　シェイクスピア城

あうるすぽっとのホワイエに「シェイクスピアフェスティバル 2014」の顔として、シェイクスピアをイメージした「ダンボールのお城」（本濃研太制作）と「イングリッシュガーデン」（Yuca Takahashi 制作）を展示した。期間中は、来場者がイングリッシュガーデンを飾る布製の花をいつでも作成し、アーチに結び付けることもできた。また、城の内側にはシェイクスピア戯曲の台詞を話す登場人物が飾られ、作品当てクイズも実施された。

■開催データ■

日時	2014 年　8 月　1 日（金）～ 3 日（日）・12 日（火）～31 日（日） （お城は 12 月まで展示）
会場	あうるすぽっと　2 階ホワイエ
参加費	無料
アーティスト	本濃研太・Yuca Takahashi
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画・製作	あうるすぽっと

■アーティストプロフィール■

本濃　研太（ほんのう　げんた）

1978 年北海道生まれ。神奈川県在住。2003 年よりダンボール彫刻を中心に活動。個展やグループ展での発表のほかに演劇、音楽、ファッション、雑貨とのコラボレーションも行っている。2012 年には宮城県の古民家を再生した「風の沢ミュージアム」半年間、自身最大規模の展覧会を開催。また、調布市せんがわ劇場にて公演された劇団「風煉ダンス」の「ゲシュタル島崩壊記」舞台美術を担当。2013 年には神奈川県芸術劇場にて公演された渋さ知らズオーケストラ『天幕渋さ船～龍轍MANDALA～』に美術として参加した。昨年あうるすぽっとにて「あうるの森」を作成した。

Yuca　Takahashi（ゆか　たかはし）

1989 年東京生まれ。東京在住。2008 年より、ファブリックと木材を扱った作品を制作中。ファッションショーの衣装や、雑貨、アクセサリーのを経て、2014 年 3 月、初の個展「糸と音と戈-SHIKITEN-展」で、音楽と、空間装飾を融合させたインスタレーション作品を発表。今後も雑貨、アクセサリーの製作と同時に、インスタレーション作品発表に向けた、音楽、空間装飾の制作を行う。

Yuca さんと自分だけのお花を作ろう！

イングリッシュガーデンを飾る、布製のお花を作るワークショップ。カラフルな布を自分だけのお花に工作し、布製のツタが絡まるアーチに結びつけた。

講師の指導の下で工作を楽しむ参加者。

作成したお花をアーチに結び付ける。

■開催データ■

日時	2014 年 8 月 1 日（金） 11:00～14:00
会場	あうるすぽっと 2 階ホワイエ
参加費	無料
参加者数	43 名
講師	Yuca Takahashi

■ホワイエの様子■

入口に置かれたシェイクスピアの胸像。

お城の高さは 4m ほど。

中には様々な台詞が書かれている。

撮影：久塚真央

■アンケートより■

・子どもたちが大喜びで、とても夢を感じる飾り付けで心身のリフレッシュに繋がりました。（匿名）

・ばらのつぼみとか、ほんもののばらみたいなことができてよかったです。またこんどいきたいです。（匿名）

■研修生の活動■

ホワイエでの作業は展示の４日前から開始された。お城の土台となる巨大なダンボールの組み立てや塗装などの作業、ガーデンに使用する布製の茎約 300 本の作成などを行った。展示開始日前日の夕方には高さ４m ほどのお城、色とりどりの花が咲くガーデン、布製の噴水が完成し、ホワイエはとても素敵な空間となった。展示初日には「Yuca さんとお花を作ろう」の受付業務、参加者のサポートなどを行った。

■研修生ノート■

期間中は、親子連れが多く来場していた。普段劇場という場所にあまり訪れる機会のない子どもが、シェイクスピアにふれる良い機会となったのではないかと思う。シェイクスピア城は「あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014」のあいだ継続して展示されており、公演の際には子どもだけでなく大人も実際に触れたり、写真を撮ったりと、アートを楽しんでいる様子が多く見られた。まさに「あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014」の顔としての存在感を放っており、訪れた多くの人にシェイクスピアを身近に感じてもらうことができたのではないだろうか。

視覚障害者お出かけ支援講座

視覚障害者の方たちが安心して劇場にお越しいただけるよう、サポート・介助するテクニックを、劇場を使って実践的に学習する講座。フロントスタッフの仕事を知って頂く事から始め、最寄り駅の改札口から劇場客席へと、実際に介助する側・される側を疑似体験し、介助テクニックを学んだ。また最終日には、実際の公演にて、スタッフとしてお客様の誘導を実践した。

■開催データ■

日時	第 1 回　2014 年 9 月 13 日(土)　10:00～16:00 第 2 回　14 日(日)　15:00～19:00 第 3 回　20 日(土)　13:00～17:00 第 4 回　23 日(火・祝)　12:00～17:00
会場	あうるすぽっと　会議室・劇場、東京メトロ有楽町線東池袋駅構内
対象	福祉・ボランティアに興味関心のある人
参加費	2,000 円
参加者数	20 名
講師	第 1 回　門田恭子(劇場プランナー) 第 2～4 回　菅谷ひとみ(劇場内介助コーディネータ)
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
協力	劇場で出会うハートライン、華のん企画、セブン・ティアーズ
助成	一般財団法人地域創造、平成 26 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

■講座内容■

第 1 回　講義「劇場フロントスタッフの仕事とは？」、劇場フロントスタッフの仕事見学

講師から劇場のフロントスタッフについての講習を受けたのちに、子供のためのシェイクスピア『ハムレット』を通してフロントスタッフの仕事を見学した。

第 2 回　講義・実習　「劇場での誘導・介助方法」

介助をする際の心構えを勉強したのちに、ペアになって会議室で基本的な介助方法について練習した。その後、劇場に移動して客席やトイレへの案内や階段の昇り降りの介助の方法も練習した。

第 3 回　講義・実習　「劇場最寄り駅から劇場までの案内・誘導方法」

劇場案内者、介助者、介助される方の三人組になって劇場案内をロールプレイ練習した。また、東京メトロ有楽町線東池袋駅でペアになって駅での実践練習を行った。

第 4 回　あうるすぽっとプロデュース公演『しぇいくすぴあ寄席』での介助実践

『しぇいくすぴあ寄席』で実際に劇場スタッフとして、視覚障害者のお客様の介助を行った。

熱心に講師の方のお話しを聴く受講者たち。

障害物がある状態でのホワイエの誘導練習。
お城や噴水の案内も練習した。

駅からお客様を案内する受講者。

■アンケートより■

・素敵なワークショップに参加させていただき、ありがとうございました。なんとなく興味を持ってふらっと参加していましたが、初心者でもわかりやすい講座で大変勉強になりました。視覚障害者に限らず体が不自由でもお出かけしやすい場が増えれば良いと思い、講座後も自分で介助の勉強を続けています。（20 代女性）

・今回の企画に参加させていただき、日常の駅や街中での自分の目線が変わりました。これをきっかけに自分でも街中で声をかけてみるなど行動ができればと思います。（40 代女性）

・講座では大変お世話になりありがとうございました。講座最終日に本番があるということでより真剣に講座を受けていたと思います。また講師の方の熱心な話や指導が私の心に伝わり受講者皆で頑張っていこうという気持ちになりました。（50 代女性）

■研修生の活動■

講座当日の受付や写真撮影を行った。また、講座に参加させてもらった。受講者には介護の仕事をしている方や親戚が目の不自由な方など、普段より視覚障害者に関わりのある方が多く、明確な目的を持って参加していた。自身も講座に一緒に参加することで、より近い立場で受講者の不安などに対し、臨機応変に対処することができた。

■研修生ノート■

講座に参加してみて、介助の際に介助をする側とされる側の信頼が大切だということが印象に残った。また視覚障害者をはじめとするすべての人が自由に訪れることのできる劇場という空間の中で、すべてのお客様に快適な空間を提供できるように介助のみに集中するのではなく、他のお客様にも気を配りながら介助をするのが難しいと感じた。『しぇいくすぴあ寄席』での介助実践では、受講者の皆さんが自信をもって笑顔で積極的に参加しているのも印象的だった。視覚障害者の方々から感謝をいただき、介助の難しさを感じながらも充実した経験になったようだ。私自身も参加者たちの熱心に学ぶ姿を見て刺激を受けた講座であった。

鴨下 信一

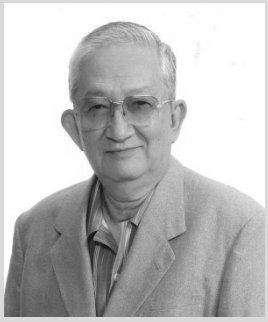
日本語の学校

演出家鴨下信一による、日本語の多様な表現を深く理解するための朗読ワークショップ。「書かれた言葉」を「どのように声に出して読めば良いか」を基本テーマとしている。8 回目の開催となる今回は、吉屋信子の『花物語』等をテキストに用いて「作家の一生と作品の変化」を考えながら進められた。また、サイドテーマとして俳句の朗読も扱われた。

■開催データ■

日時	2014 年 10 月 11 日（土）　11:00～17:00 12 日（日）　11:00～17:00 18 日（土）　11:00～17:00 19 日（日）　11:00～17:00 25 日（土）　11:00～17:00 26 日（日）　11:00～17:00
会場	あうるすぽっと　会議室
対象	高校生以上、日本語によるあらゆる表現を目指す方 ワークショップ全日程（6 回）に参加できる方
参加費	16,000 円
参加者数	35 名
講師	鴨下 信一
主催	あうるすぽっと（公益財団としま未来文化財団）、豊島区
企画制作	あうるすぽっと、劇書房
助成	平成 26 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

■講師プロフィール■



鴨下　信一（かもした しんいち）

1935 年、東京都生まれ。1858 年、東京大学美学科卒業後、TBS に入社。ドラマ、音楽など多くの番組を演出。主な作品に「岸辺のアルバム」「ふぞろいの林檎たち」「高校教師」「渡る世間は鬼ばかり」など。また、舞台の演出家としても評価が高く、特に白石加代子の『百物語』『源氏物語』は、朗読を見事な一人芝居に高めた画期的な作品として注目を浴びている。

■ワークショップ内容■

参加者は一人一人決められた部分を順番に朗読し、それに対して講師が抑揚や文章の解釈などの読み方について指摘をしていくという形で進められた。個別に指導を受ける時間は限られてしまうが、他の参加者へのアドバイスを聞くことも自らの朗読を振り返る良い時間となっていた。

講義は時に厳しく時に和やかに進む。

参加者は熱心に鴨下氏の話に耳を傾けていた。

■アンケートより■

・今回で三回目の参加となり、いつも新たな課題と問題提起に四苦八苦させていただきました。年一度しか開催されないのが残念ですが、数少ない学びの場と、情報収集、知識吸収の場と親しみをもって今後も精進していきます。ありがとうございました。(20 代女性)

・先生には、これからも教えて頂きたいことが沢山あると感じております。俳句、とてもとても面白かったです。教科書にはない世界を知ることができました。敬遠せずに親しんでいきたいと思います。(50 代女性)

・有意義な時間でした。毎年ありがとうございます。一年に一度頑張って取り組むときがあってとても良かったと思います。これからも日本語の学校がずっと続くことを願っています。(40 代女性)

■研修生の活動■

講義に使用するテキストのワードデータを作成し、その発送作業の補佐を行った。また、講義中講師が前方からでもよく見えるよう工夫し、机の上に置く名札を作成した。講義開始日からは、研修生が交代で受付業務を行った。

■研修生ノート■

大変熱心な受講者が多いことが印象的であった。中には開始時刻より早く来て朗読の練習をしている方もいらっしゃり、熱心さが窺えた。毎年恒例のワークショップということもあり、過去に受講経験がある参加者も数多くいた。日頃何気なく目にしている言葉でも、朗読においては意味を解釈した上で声に出すことが大切である。そのため朗読を極めることは、書かれている内容が精細に思わぬところまで見えてくるようになるものであると感じた。このように、講義は朗読という日本語表現を学ぶことに限らず、日常生活においても「考える習慣をつけること」や「丁寧に解釈すること」を意識することの大切さをも感じさせるものだった。

あうるすぽっと＋都立大塚ろう学校＋NPO 法人大塚クラブ協力事業

「からだでコミュニケーション」ダンス・ワークショップ

聴覚障害者の子どもたちを支援する NPO 法人「大塚クラブ」、都立大塚ろう学校との協力で、振付家・ダンサーの鈴木ユキオさん、ろうの子どもたち、そして一般公募の大人たちとともに、計 4 回のワークショップ『ダンスじゃないダンス』に取り組んだ。子どもたちの身体表現がダンスになる瞬間の創造を、大人たちがサポートしながら協力し合い、一つの作品を作りあげた。最終日には、あうるすぽっとの劇場で成果を披露した。

■ワークショップ 開催データ■

日時・場所	2014 年 11 月 28 日（金）　15:30～17:00　大塚ろう学校 会議室 12 月 12 日（金）　15:30～17:00　大塚ろう学校 体育館 2015 年 1 月 9 日（金）　15:30～17:00　大塚ろう学校 体育館 12 日（月・祝）10:00～17:30　あうるすぽっと 劇場
対象	ろう学校に通う子どもたち、一般公募で集まった大人たち
参加費	子ども：無料　大人：3,000 円
講師	鈴木ユキオ（助手：安次嶺菜緒・赤木はるか・南雲麻衣）
参加者数	子ども：11 名　大人：6 名
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画・製作	あうるすぽっと
協力	都立大塚ろう学校、NPO 法人大塚クラブ、ミューズ・カンパニー
助成	平成 26 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

■講師プロフィール■

鈴木 ユキオ（すずき　ゆきお）

「YUKIO SUZUKI Projects」振付家・ダンサー。

しなやかで繊細、且つ空間からはみだすような強靭な身体・ダンスで多くの観客を魅了する。欧米やアジアでの国際ダンスフェスティバルをはじめ、国内外、屋内外を問わず作品を発表している。2008 年、トヨタコレオグラフィーアワードにて「次代を担う振付家賞（グランプリ）」受賞、2012 年、パリ市立劇場「Danse Elagie」では 10 組のファイナリストに選ばれた。HP:www.suzu3.com

■ワークショップ内容■

・一人が即興でポーズやダンスをし、皆でまねる
・二人一組で相手を操る
・白い紙を頭の上に乗せ、落とさないように動く
・お互いの身体をくぐり合うゲーム
・名前の指文字を身体を使って大きく表現する

円になって一人のまねをみんなで

■研修生の活動■

研修生は全ワークショップに順番に参加し、主に写真と動画の撮影をした。子どもたちと大人たちがワークショップを重ねるにつれ、徐々にコミュニケーションの取り方を理解し、良い関係に変化していく様子がうかがえた。

■発表会 開催データ■

日時・場所	2015 年 1 月 12 日（月・祝）16:30～17:00 あうるすぽっと 劇場
入場料	無料
入場者数	59 名
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
協力	都立大塚ろう学校、NPO 法人大塚クラブ
企画協力	ミューズ・カンパニー
企画・製作	あうるすぽっと
助成	平成 26 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

■発表会の様子■

操るダンス。

雪が降るような演出で幻想的な雰囲気となった。

■アンケートより■

・はじめて舞台を観ました。子どもたちの生き生きとした表情良かったですね。（60 歳以上女性）
・最後とてもきれいな場面になり感動しました。子どもたちが楽しく参加していてほほえましかった。（女性）

■研修生ノート■

最初のワークショップでは、大人がろう学校の子どもたちとのコミュニケーションの取り方がわからず困っているような場面があり、子どもたちの方が自由に堂々としていることに驚いた。2 回目以降のワークショップでは、大人がよくリードし、仲も深まり、協力し合っている様子が見受けられた。子どもたちが想像以上に積極的であったことが印象的であった。
本番での子どもたちは本当に生き生きと輝いていた。健常者、障害者の垣根はなく、全力で身体を動かす子どもたちの元気なパワー溢れるステージは、観ていて自然と笑顔になった。クライマックスの雪が降る演出は大変美しく、幻想的な雰囲気の余韻を残しつつ幕を閉じた。

あうるすぽっとホワイエリーディング

劇団昴音楽朗読劇『クリスマス・キャロル』

今年度も豊島区を本拠地として活動している劇団昴による『クリスマス・キャロル』のリーディング（朗読劇）を開催した。毎年恒例の公演となっており、お子様連れのご家族など普段劇場に足を運ぶことが難しい方々にも気軽に楽しんでいただけるように、入場無料、申込不要、入退場自由の公演となっていた。劇場のホワイエに舞台、客席を設置し、ピアノの生演奏の中、音楽朗読劇を行った。

■開催データ■

日時	2014 年 12 月 24 日（水）　15:00～ 25 日（木）　12:00～、16:00～
会場	あうるすぽっと　ホワイエ
入場料	無料
来場者数	2014 年 12 月 24 日（水）　15:00～：141 名 25 日（木）　12:00～：109 名 16:00～：137 名
出演者	西本裕行、島畑洋人、市川奈央子、染谷麻衣、三輪 学 加賀谷崇文、高木裕平、上田 亨（音楽・ピアノ演奏）
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画製作	演劇企画 JOKO
協力	劇団昴
助成	平成 26 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

■アーティストプロフィール■

劇団昴（げきだんすばる）

劇団昴は文京区千石にあった三百人劇場を本拠地とし、1976 年、第 1 回公演アルベール・カミュ作『カリギュラ』から始まり、2006 年、『八月の鯨』に至るまで、30 年間に 110 本以上の演目を上演。代表作として、『セールスマンの死』『クリスマス・キャロル』『アルジャーノンに花束を』『チャリング・クロス街 84 番地』等。2006 年、年末の三百人劇場閉館に伴い、「劇団昴一般社団法人」として、和洋新旧問わず優れた演劇作品の上演を続けている。

研修生が作成したチラシ

■ストーリーあらすじ■

クリスマス・イブの夜、けちで頑固な老人スクルージは 7 年前に死んだ同僚のマーレイの亡霊と過去・現在・未来の精霊たちに導かれ、時空を超えた不思議な時間を過ごす。そこに見たものは、孤独な老人スクルージが過ごした少年時代、スクルージが気付かずにいた温かな家族の営みや愛情、そして未来に待っている恐ろしい出来事……。
すべての時間が過ぎた後に訪れる一人の老人の心の再生――人間への慈しみにあふれた物語。

撮影：久塚真央

■アンケートより■

・劇中にゲームがあって子どもが参加し易く、飽きないなぁと思いました！　クリスマスイブに素敵なお芝居と出会えて嬉しいです。役者さんたちのくるくるとかわる表情、声色がとても魅力的でした。（18～29 歳女性）
・さいしょはこわくてきんちょうしたけど、みんなで遊べたり楽しかったです。私が住んでいる市はこういうことをあんまりしないので、よかったです。（女性）

■研修生の活動■

公演前に、チラシのデザインや印刷作業を行った。
見やすく、分かりやすいデザイン案を作成することにとても時間を要したが、「たくさんのお客様に公演を見に来てもらうことのできるチラシ作り」、「情報が伝わりやすいチラシ作り」ということを考える良い経験になった。
また、豊島区内の小学校へ作成したチラシの送付作業も行った。
当日は、入場者にパンフレットを配り、入場者数の確認をした。

■研修生ノート■

0 歳児のお子様から入場が可能ということで、幅広い世代のお客様がいらっしゃっていた。小さいお子様を連れたご家族のお客様も多く、普段劇場に足を運ぶことが少ない世代のお客様に劇場に足を運び、劇場を知っていただく良い機会になっていると感じた。また、気軽に演劇に触れることができ、お子様たちにとっては演劇の魅力を知るきっかけになるのではないかと思う。『クリスマス・キャロル』は小さなお子様にとって難しいお話と思われたが、途中にゲームの時間を作るなどの工夫もされていた。静かに観劇する時間と途中ゲームで楽しむ時間とメリハリのある構成になっており、子どもも大人も一緒に楽しめるという今まで体験したことのない公演であった。

あうるすぽっと×日本大学芸術学部共同研究事業

としまっぷ計画

“あうるすぽっと”と“日本大学芸術学部”の共同研究事業である「としまっぷ計画」では、豊島区立の劇場である“あうるすぽっと”と“地域”が出会うため、パフォーミングアーツを使った企画を実施している。今年度は日本大学芸術学部演劇学科企画制作コースに所属する学生が、二つのワークショップを開催した。

■開催データ■

主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画・制作	あうるすぽっと、日本大学芸術学部演劇学科
助成	平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

ワークショップ･はじめて知る「劇場」『はじめまして劇場のなかまたち』

小学生を対象に、普段なかなか知ることができない劇場の仕組みや舞台用語を楽しく学ぶワークショップを開催した。舞台用語をモチーフとしたキャラクター「いたつきくん」を進行役に、劇場に隠れているキャラクター（劇場のなかまたち）を探し出し、舞台用語キャラクター図鑑を完成させた。

■開催データ■

日時	2015 年 2 月 15 日（日）　10:30～11:30
会場	あうるすぽっと　会議室
対象	小学生（今春入学も含む）　※保護者 1 名まで見学可能
参加費	無料
参加者数	2 名

■ワークショップ内容■

着ぐるみの「いたつきくん」（写真右）と一緒に舞台用語について学んでいく。

■アンケートより■

・未就学児で内容が理解できるか心配でしたが親しみやすい内容で子供も楽しんでいたと思います。普段見ることのあまりない舞台の裏側を知ることができたと思います。（保護者）

■研修生の活動■

ワークショップ当日の記録・見学を行った。

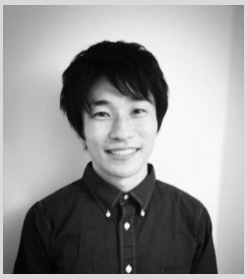
劇場でよるかつ！ーあなたのコリをちょっとほぐすワークショップー

進行役に劇団「ままごと」の大石将弘を迎え、はたらく人が抱える悩みやコリをほぐす演劇ワークショップを開催した。開催された 3 日間はそれぞれ「私を満たす、ほしいもの編」「もうすぐバレンタイン！恋愛と結婚編」「私たちの人生設計、未来と老後編」というテーマに沿って進行した。

■開催データ■

日時	2015 年　2 月　5 日（木）　19:30～21:30 12 日（木）　19:30～21:30 19 日（木）　19:30～21:30
会場	あうるすぽっと　会議室
対象	16 歳から 29 歳までの働く人
参加費	3 回通し：500 円　1 回：200 円
参加者数	5 日：18 名、12 日：23 名、19 日：19 名
進行役	大石将弘、田幡裕亮（世田谷パブリックシアター／ゆーじーず）

■進行役プロフィール■



大石　将弘（おおいし　まさひろ）

1982 年奈良県生まれ。3 年間の会社員経験を経て、現在俳優。劇団「ままごと」と「ナイロン 100℃」に所属。北九州や小豆島など日本各地に滞在しながら演劇創作に参加する他、東京・横浜を中心に演劇公演に出演。小中学校や劇場で行われるワークショップのファシリテーターとしても活動。

■ワークショップ内容■

遊びながらそれぞれの未来と老後を考える。

■アンケートより■

・演劇で気楽にあそべてたのしかったです！またやったり、みたり、してみたいです。（29 歳女性）

・様々なシチュエーションで働いてる方々に出会えたのが面白いなと思いました。（26 歳女性）

■研修生の活動■

ワークショップ当日の記録・見学を行った。

■研修生ノート■

「劇場のなかまたち」では、舞台照明の「暗転」を実際に体験してみる、シールを用いて舞台用語キャラクター図鑑を作るなど、子どもたちが体験を通じて舞台に親しめるような工夫が随所になされていた。

「劇場でよるかつ！」では、簡単なゲームを通して笑い合ったり、将来やってみたいことについて話しあったりと、参加者がリラックスして「コリ」をほぐしていたのが印象的だった。

アートマネジメント研修生企画

社会人予備軍のためのコミュニケーションワークショップ

社会に出て働くことに不安を抱えている社会人予備軍に対し、コミュニケーション力を見つめなおすワークショップを2日間に渡り開催した。講師には即興パフォーマンス集団である6-dim+を迎えた。筋書きのない場面を誰かと演じる即興演劇で重要な「相手の立場に立って、相手が何を望んでいるか考えること」「失敗しても気にしすぎないこと」を通し、不安を払拭するヒントを模索した。

■開催データ■

日時	2015年　2月 26日（木）　19:00～21:00 27日（金）　19:00～21:00
会場	あうるすぽっと　会議室
対象	18歳から25歳程度の大学生、専門学生、大学院生など
参加費	500円
参加者数	18名
進行役	6-dim+よりカタヨセヒロシ、渡猛、りょーちん
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画・制作	あうるすぽっとアートマネジメント研修生
助成	一般財団法人地域創造 平成26年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

■進行役プロフィール■

6-dim＋（ロクディム）

「この瞬間を一緒に笑おう。」をキーワードに、観客と一緒に「今、ここ」を「つくり」「たのしみ」「共感・体験・大笑い」する即興芝居×即興コメディパフォーマンスを中心に活動中。劇場のみならずカフェ、神社、学校など「いつもの場所をあっという間に『笑い溢れるコメディ空間』へ」変えながら、日本各地を巡り公演を行なっている。ライブパフォーマンスのほか、日本 GE・面白法人カヤック・パナソニック株式会社・埼玉縣信用金庫をはじめとする企業各社での新入社員研修や、京都精華大学・名古屋大学・常磐大学などの学生や演劇関係者に向けたコミュニケーションワークショップの講師活動も多数行っている。

研修生が作成したチラシ

■ワークショップ内容■

1 日目は、即興演劇を使って体を動かした。答えがないものに対する不安や、失敗することへの恐れなどの感情を客観的に見直す時間となった。

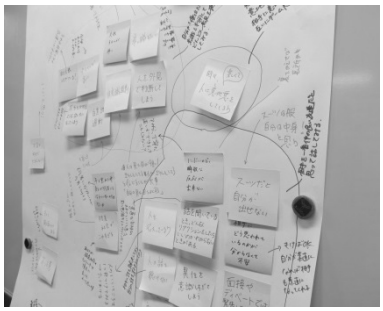
2 人 1 組となりゲームを行っていく。

フィードバックが行われる。

和気あいあいとした雰囲気の参加者。

2 日目は、社会に出るにあたっての様々な悩みを実際に書き出し、他の参加者の悩みに対してアドバイスを書くなど、楽しみながらも真摯に自分と向きあった。

付箋に悩みを書き模造紙に貼っていく。



模造紙は様々な悩みとそのアドバイスで埋め尽くされた。

真剣な面持ちで意見を出し合う。

■アンケートより■

・初めてワークショップに参加したが、短い時間だが、自分を見つめ直せたり、意識を変えることができるのだなと感じ、良かったと思った。(20 代女性)

・課題や不安に対し、少しずつ解決に向かうだろう策があるのにそれをせずいたずらに不安と呼ぶことで逃げていた自分に気づいた。(20 代男性)

・身体に任せて外に出ることの勇気がちょっと出てきたというか、自分からもっと積極的に動いてみようと思いました。(20 代女性)

■研修生の活動■

8 名の研修生を 4 つの役割に分担し、進めた。「全体進行・当日運営」は、参加者の管理（応募メールへの返信、参加者リスト作り）、当日のタイムテーブル作成、SNS 管理等を担当した。「広報」は、チラシ作り、チラシ送付、web サイトなどへの書き込み、プレスリリース作成などを担当した。「会計」は、予算案作成、企画後の会計報告作成を担当した。「渉外」は、講師との連絡・謝礼交渉を担当した。それぞれ担当した役割だけでなく、必要時には連携しながらの進行となった。

■研修生ノート■

本ワークショップは、あうるすぽっとアートマネジメント研修生が 9 か月間の集大成として企画したものである。研修生自身にとっても身近な悩みであった「社会に出るにあたっての不安」に対し、劇場ならではの即興演劇という側面からのアプローチを試みた。朝日新聞やとしまテレビからの取材を受けるなど、注目度の高いワークショップとなった。大学生を中心とした参加者はそれぞれ様々な不安を抱えていたが、講師からの言葉にはその不安とポジティブに向き合う要素が散りばめられていた。即興演劇を使った数種類のワークを通じて、参加者自身の身近な悩みや不安を考え、解決に導くきっかけを作ることができたのではないかと感じた。そして社会人予備軍として、社会に出ていくことへの不安を前に進む自信に変えることができたのではないだろうか。

豊島区立中央図書館　特別展示

あうるすぽっとが入るライズアリーナビルの 4・5 階にある豊島区立中央図書館にて、2014 年 7 月から 2015 年 3 月まで、毎月図書の展示を行った。目的は、図書館利用者にあうるすぽっとを知ってもらうこと、公演に興味をもってもらい劇場に足を運んでもらうこと、また、毎月の展示を替えることで図書館利用者が図書館に訪れる楽しみを増やすとともに、新たな本に出会う機会を提供することである。その月のあうるすぽっとの公演や事業に関連した図書を展示するだけではなく、作品の説明、公演のチラシの設置もした。アートマネージメント研修生による推薦図書というテーマで展示を行うこともあった。

今年度は、シェイクスピアの生誕 450 周年にちなんだ「あうるすぽっとシェイクスピアフェスティバル 2014」が開催されていたため、シェイクスピア作品の上演が多く続いた。図書館展示でも、毎月違った書籍を展示するために、シェイクスピアの紹介・関連図書を様々な角度から集めることとなった。シェイクスピアという作家の文芸に対する影響力を、図書館利用者に伝えるだけではなく、アートマネージメント研修生の私たち自身も感じることができた。

■展示内容一覧■

2014 年 7 月	読むべきか読まざるべきか　今こそ読むべきハムレット 関連事業： KUNIO『 ハムレット』(P６)
8 月	コリオレイナスって知ってる？　夏こそ読む！　ツウな本 関連事業：地点『コリオレイナス』(P８)
〃	マクベス 関連事業：子どもに見せたい舞台シリーズ『マクベス』
9 月	初めての恋、運命の恋 関連事業：『ロミオとジュリエットのこどもたち』(P12)
10 月	男女が生み出すのは・・・喜劇！？　悲劇！？ 関連事業：『じゃじゃ馬ならし』(P14)
11 月	フランス文化の実は〇〇！！ 関連事業：『インサイド・ナイト』(P16)
12 月	あうるすぽっとインターン生がオススメする！　クリスマスに読みたい本 関連事業：劇団昴音楽朗読劇『クリスマス・キャロル』(P38)
2015 年 1・2 月	演劇を知ろう！
3 月	あうるシェフのよみきかせレストラン 関連事業：お母さんお父さんのための絵本読み聞かせワークショップ

■個別展示内容■

7 月　読むべきか読まざるべきか　今こそ読むべきハムレット

関連事業：KUNIO『ハムレット』

シェイクスピアの有名長編悲劇『ハムレット』。タイトルは知っていても、詳しい内容は知らない人に興味を持ってもらえるような展示を心がけた。『ハムレット』にまつわるいくつかのキーワード（デンマーク、亡霊、王子、作者シェイクスピア等）を取り出し、関連する本を選んだ。展示準備を通じて、関連図書の多さから、『ハムレット』の影響力や、現代におけるシェイクスピアの存在の大きさを感じることができた。実際に展示した冊数も多く、利用者にとっても、目と興味をひかれる展示となっただろう。

8 月　コリオレイナスって知ってる？　夏こそ読む！　ツウな本

関連事業：地点『コリオレイナス』

『コリオレイナス』という、シェイクスピアの中でも「ツウ」な作品が題材であった。作品の関連図書も少なく、この作品にどうアプローチするかが難しい展示であった。最終的に、舞台であるローマと、シェイクスピアの出身国であるイギリスの有名作家の「ツウ」な本という二つのテーマで選書した。『コリオレイナス』を知らない人が多いと考えられたため、簡単な紹介文を中央に設置した。文庫本が多く、落ち着いた雰囲気となり、利用者にとっては手に取りやすくなったと思われる。

8 月　マクベス

関連事業：子どもに見せたい舞台シリーズ『マクベス』

子どもに見せたい舞台シリーズ『マクベス』と連動させた企画のため、子どもたちがマクベスやシェイクスピアの世界に親しみを持てるような展示を目指した。マクベスの住むお城をモチーフとした装飾を施し、マクベスのあらすじボードを展示した。王さまや魔女が登場する絵本を中心に選書し、子どもたちがマクベスの世界観をイメージできるよう工夫した。シェイクスピア作品の絵本版も展示し、子どもたちがシェイクスピアの世界に触れる第一歩に寄与できたのではないかと考える。

9 月　初めての恋、運命の恋。

関連事業：『ロミオとジュリエットのこどもたち』

シェイクスピアの有名な戯曲『ロミオとジュリエット』を原作とした『ロミオとジュリエットのこどもたち』と連動した企画。「初めての恋、運命の恋。」をテーマとし、ロミオのような運命の恋、ジュリエットのような初めての恋を扱った恋愛小説を展示した。ポップなイラストや、花をモチーフにした明るくかわいい装飾を施し、若者の目をひく工夫をした。同時に、展示する恋愛小説は最近の日本のベストセラーから海外文学の名作まで幅広く選書し、広い年代の人にも手に取ってもらえる展示を目指した。

10 月　男女が生み出すのは・・・喜劇！？　悲劇！？

関連事業：『じゃじゃ馬ならし』

『じゃじゃ馬ならし』は男と女の駆け引きや、夫婦の関係を描いた作品であるため、男女の関係・結婚生活についての本を集めた。フェミニズム関連の新書なども展示したが、あくまでもキャッチーなタイトルを心がけ、図書も興味を惹きやすく読みやすそうなものを集めた。男女のドラマが物語内だけではなく現実にも存在することを思わせるような展示装飾を目指した。小説、エッセイ等幅広いジャンルの本を置くことで、より多くの人に楽しんでもらうようにした。

11 月　フランス文化の実は〇〇！！

関連事業：『インサイド・ナイト』

『インサイド・ナイト』はアンスティチュ・フランセ東京との共同企画であり、現在ヨーロッパで注目を集める新しいサーカス「ヌーヴォー・シルク」の公演である。展示では、フランスの新たな一面が分かるようなポップを作り、幅広い人々に興味を持ってもらえるよう心掛けた。青少年向けの公演ということにも注目し、手に取りやすい図書や絵本を集めたことで、堅苦しくならないように気を付け、チラシのポップなデザインを活かすレイアウトにした。

12 月　あうるすぽっとインターン生がオススメする！　クリスマスに読みたい本

関連事業：劇団昴音楽朗読劇『クリスマス・キャロル』

ディケンズの有名著作『クリスマス・キャロル』に関連した企画。クリスマスに読みたい本をインターン生が一人一冊選び、そのポップを書いて展示した。選んだ本やポップにそれぞれの個性が出て、より展示に興味を持ってもらえたのではないかと思う。オーナメントを手作りしたり、タイトルを手書きで書いたりすることで、アットホームな雰囲気の展示になった。クリスマスの本ということで、デザインが可愛らしい本や美しい本が多く、飾りやポップとマッチして視覚的にも楽しめるものになった。

1・2 月　演劇を知ろう！

二階にある「あうるすぽっと」の紹介と、演劇そのものの魅力を伝えるための企画。「演劇」という広いテーマに、どのようにアプローチしていくかが課題となった。最終的には、演出家のエッセイや、音響・照明・舞台美術など演劇をつくる人々の関連図書、国内外の有名戯曲、公立劇場である「あうるすぽっと」にちなんだ劇場関連図書を展示した。装飾に関しても、紙とイラストで舞台を再現するなど、面白みに富んだ展示を心がけた。図書館に訪れる人々が、「あうるすぽっと」にも足を運ぶきっかけとることを目指した。

3 月　あうるシェフのよみきかせレストラン

関連事業：お母さんお父さんのための絵本読み聞かせワークショップ

読み聞かせで読んでもらいたい、インターン生の思い出の本をおすすめするというコンセプトで、「よみきかせレストラン」というテーマとした。おすすめの本と思い出をレストランのメニューをまねて展示した。メニューは冊子型で、表紙を開くと中のメッセージが読めるようにし、「見る」だけではなく「さわれる」展示を目指した。中央には、普段はなかなか触れる機会がない大型の絵本を置いた。カラフルな表紙と装飾が目を引き、思わず足を止めて眺めたくなるような展示になったのではないか。

Ⅲ．アートマネジメント研修

アートマネジメント研修プログラム

劇場の運営スタッフや舞台芸術分野の第一線で活躍するクリエーターと共に、現代演劇・舞踊を中心とした舞台芸術の創造及び公共劇場が担うべき教育事業に関わりながら、事業制作・管理運営について学ぶプログラム。また、文化政策に関わる知識を劇場運営や各事業の現場で活用するために、特別講習が開催された。

■開催データ■

期間	2014 年 6 月 1 日～2015 年 2 月 28 日
場所	あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）他
対象	舞台芸術分野や文化行政分野でのキャリアアップを目指す東京都内･近郊の大学生、大学院生、既卒者他
研修形態	原則として週 3～4 日程度。講習、事業日等は夜間研修有り
主な業務	①　事業制作業務（ワークショップ等含む） ②　広報宣伝業務 ③　劇場管理運営業務
研修費	50,000 円
研修生数	8 名
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
助成	一般財団法人地域創造 平成 26 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ
監修	片山泰輔（静岡文化芸術大学文化政策学部教授）

■講師プロフィール■

片山　泰輔（かたやま たいすけ）

慶應義塾大学経済学部卒。東京大学大学院経済学研究科後期博士課程単位取得満期退学。三和総合研究所主任研究員等を経て現職。日本文化政策学会副会長、日本アートマネジメント学会関東部会長、一般社団法人浜松創造都市協議会理事、公益財団法人東京交響楽団評議員。専門は財政・公共経済、芸術文化政策。1995 年、芸術支援の経済学的根拠に関する研究で日本経済政策学会大会 50 周年記念学会賞(奨励賞)受賞。2007 年、著書『アメリカの芸術文化政策』で日本公共政策学会学会賞(著作賞)受賞。

特別講習

この特別講習では、座学の講義形式で劇場・演劇の歴史や現状、法律・政策、アートマネジメントに関する基礎的な知識を学び、文化・芸術分野で活動・活躍されている方々の貴重な講演を聴くことができた。

劇場運営や各事業の現場での活用を目的とした「文化政策に関わる知識」を学ぶ講習となっていた。文化・芸術分野に携わっていく中で、根本となるような様々な知識を得ることができた。

第一回	2014 年 6 月 29 日（日）　「日本の文化政策の歴史と特徴」
講師	片山泰輔
内容	戦前から戦後にかけての文化政策の歴史と特徴の変遷を時代ごとに学んだ。

第二回	2014 年 7 月 20 日（日）　「経済学（財政学）における政府の役割と芸術文化」
講師	片山泰輔
内容	「資源分配の方法」、「財政の三つの機能に対しての文化のあり方」など、経済学と芸術文化の関係について学んだ。

第三回	2014 年 8 月 17 日（日）　「文化施設と指定管理制度」
講師	片山泰輔
内容	「日本における文化施設の整備」や「指定管理制度」について学んだ。また併せて、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」について学んだ。

第四回	2014 年 10 月 5 日（日）　「豊島区の文化政策」
講師	倉本彩子
内容	豊島区の文化デザイン課の来歴や豊島区の文化政策について、区職員の方から講義を受けた。

第五回	2014 年 11 月 9 日（日）　「アートマネジメントの基礎(非営利のマネジメント)」
講師	片山泰輔
内容	「アートマネジメントの定義」や「組織のマネジメント」からアートマネジメントとは何か学んだ。また、非営利経営の特徴からさらに深くアートマネジメントの捉え方を学んだ。

第六回	2014 年 12 月 14 日（日）　「NPO 法人「芸術家のくすり箱」創設者、福井恵子氏による講演」
講師	福井恵子
内容	福井氏がどのようにして、芸術にかかわり、どのような意志で「芸術家のくすり箱」を設立したかを伺った。

第七回	2015 年　1 月 25 日（日）　「自治体文化政策と公共劇場」
講師	宮崎刀史紀
内容	「自治体の文化政策と公共劇場」について、「劇場とは何か」「劇場にとって、自治体の文化政策とは」という側面から話を伺った。また宮崎氏の今までの経験をもとに「劇場ができるまで」、「劇場運営に携わるスタッフとは」などを学んだ。

研修生レポート

広がった視界

舞台が好きで好きで、舞台に関わる仕事がしたい。公共劇場で働きたい。あうるすぽっとのインターン研修に申し込んだ時、私の頭にはその一心しかなかったように思う。当時私は就職活動中で、「舞台に関わる」という自身の夢と厳しい現実の狭間で苦しみ、未来に対する不安で押しつぶされそうだった。9 か月という長い研修期間を設けているこのインターンシップで、なんとか夢への足掛かりを見つけたいと必死だった。

研修が始まり、「にゅ～盆踊り」のポスターを豊島区内の掲示板に貼ってまわる、という仕事をすることになった。炎天下、自転車や徒歩で豊島区中にポスターを貼っている途中、「へえ盆踊りをやるんだ」と話しかけてくださった方がいた。「はい、遊びにいらしてください」と答えた時の胸の高ぶりを忘れない。にゅ～盆踊り本番では、櫓の上のダンサーと共に盛り上がる参加者の踊りがまぶしく、嬉しかった。公共劇場は地域と交流する場である。その言葉を頭では分かったつもりでいた。あうるすぽっとでの活動を通して、「地域の人々」という言葉が実体を持ったものとして私に迫った。公共劇場のインターン研修生である私の活動に対して、今まではあいまいな存在だった「地域の人々」から反応が得られること。私の微々たる働きが「地域の人々」の喜びとなること。それは当たり前のことではあるが、私にとっては新鮮な発見であり、喜びであった。今インターン生活を振り返って思い出すのは、出会った多くの人々の顔である。公演の終わり、スタッフとしてお見送りをする私に「ありがとう」と声をかけてくださったお客様。ワークショップ参加者の笑顔。公演が終わったあと、嬉しさと安堵のためか涙を見せたアーティスト。私は誰のために劇場という場に憧れ、働きたいと願っていたのか、考えさせられる瞬間だった。

この研修は、文化芸術、特に舞台芸術業界の事情について垣間見る機会でもあった。厳しい業界であり、問題は山積している。だが、それでも、「芸術が好き」という想いを持つ多くの人が多様な面からアプローチしていることを知り胸が震えた。行政、NPO、研究機関等、私が思っている以上に文化芸術への関わり方は様々だった。毎月の特別講習でアートマネジメントの理論を学ぶことができたことも大きな収穫の一つだ。講師である片山先生の「アートマネジメントを学ぶには現場を知らなければならない」という言葉が心に残っている。インターン生活はまさに、頭では分かっていたつもりのことを「現場」で実感する日々だった。

あうるすぽっとでの 9 か月は、私の目を外へと開いてくれた。研修が始まる前、私は「舞台が好き、舞台の仕事がしたい」という自身の想いばかり見つめていた。今、私の目は文化芸術を取り巻く広い世界のことを少し視野に入れられるようになったと思う。それを可能にしてくれたのは、あうるすぽっとで見つけた人との関わりであり、身につけた知識である。研修終了後、私は文化芸術を支援する者の一人として働くことになっている。誰のために、何のために働くのか。「舞台好き」な私の自己満足のためではなく、自身の周囲にいる人の喜びのために力を尽くしたい。それが私の喜びにもつながるはずだ。この発見が、私にとってあうるすぽっとで得た最も大きな財産である。

末尾になりましたが、あうるすぽっとの職員の皆様と片山先生に深く御礼を申し上げます。皆様の文化芸術に携わる姿勢からは多くのことを学びました。9 ヵ月間活動を共にした 7 人のインターン仲間にも感謝いたします。8 人揃って研修を終えることができ、本当に嬉しいです。ありがとうございました。

荒井　菜摘（あらい　なつみ）
筑波大学　社会・国際学群　国際総合学類 4 年

箱入り娘、大海を知る。

あうるすぽっとに入った当初の私を一言で表すならば、“放任された世間知らず娘”である。放任主義な両親のもとで育ったおかげで中高生時代からお笑いや音楽のライヴに通い詰め、大学に入ると自然と演劇を見るようになった。その反面、中高一貫校に通い、同じようなレベルの家庭で育ち同じような考えの振れ幅を持った人に囲まれた“井戸”の中で６年間を過ごした。それじゃあだめだと感じて早稲田という大学を選んだものの、持ち前の人見知りで“井戸”から抜け出せない、という日々を送っていた。私があうるすぽっとのインターンに応募したのは「演劇の世界をもっと知りたい」という純粋な好奇心からだった。しかし、そんな私に結果としてあうるすぽっとでのインターン生活は、私が知りたいと感じていた以上にたくさんのことを教えてくれたように思う。

劇場は、様々な人が行き交う場所だ。開演前のホワイエにいると、客席に入っていく人たちの年齢や、服装や、性別がばらばらであることに驚かされる。イングリッシュガーデンでバラの花を作った時には、公演事業の時にはあまり見ることのない小さな子どもたちがたくさん来てくれた。ワークショップの受付をやっていても、遠くからわざわざ受講しに来てくださっている方が少なくない。私が大学生活を送る中では出会うことのなかった多くの人に、あうるすぽっとを通して出会うことができた。また、あうるすぽっとで時を過ごした人たちが皆、幸せそうに去っていくのを見て、劇場という場の重要さを感じた。

あうるすぽっとでの事業に関わる中では、演者、裏方問わず劇場に生きる人々との出会いも数え切れないほどあった。私のこれまでの人生の中で、“井戸”の中にいては出会えなかった人たちと、直接会話を交わすことができた。今までやってきたこと、今やっていること、これからどうするか、話をうかがううちに、だんだんと自分の視界が開けていくのを感じた。私が漠然とイメージしていた、いわゆる“人生”は人の数だけある生き方のうちの一通りに過ぎなかったことを知り、また、私が今までイメージしていた生き方ではなくても、幸せに活き活きと“人生”を送っている人がいることに気付かされた。

世の中にはいろんな人がいて、いろんな人生を送っている。

あうるすぽっとで９か月間かけてこの当たり前の事実を知ることができたことが、私のインターン生活一番の財産だ。誰もが知っているはずのこの事実を私が知ることができたのは、あうるすぽっとという場が私にとって、大学でも家でも塾講師のバイトでもない、社会の入口として存在してくれたからに違いない。もしあうるすぽっとという場に出会えず、私がインターン生になる前にぼんやり考えていた人生と同じルートを歩んでいたら、きっとこのことを知るのにはもっと時間がかかっただろう。

“放任された世間知らず娘”は、あうるすぽっとを通じて少しだけ社会という大海を知った。未だ知らないことも多く、マイペースさはとどまるところを知らず、そのために奔走しなければいけないこともあるが、それなりに少しずつ成長していっている（つもりだ）。そして、中学受験、大学受験後の先にある、就職活動という人生三度目の転機を迎えているが、なんとなく落ち着いて構えていられる。人の数だけある人生のうちで私の通る一本は、正解があるわけでも、失敗が許されないわけでもない。私は私らしく、自分の一本を自分で作っていくだけだ。

市原　菜穂子（いちはら　なほこ）
早稲田大学　商学部３年

わくわくを追い求めて

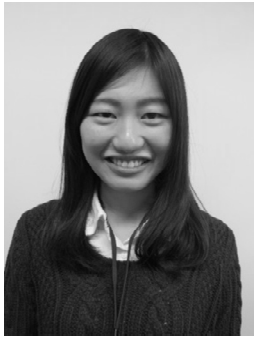
大学生になり、新しい世界が広がった。娯楽なだけではない芸術の姿を知り、心惹かれた。それからというもの、芸術に関わる NPO や学生団体を探しては参加を重ねてきた。大学 2 年生の終わり頃、半年ほど関わったフィリピンで音楽教育をする活動に区切りがつき、大きな充実感を得たと同時に、これ以上の経験はできないのではという喪失感と焦燥感に駆られた。実技皆無の文学部芸術学科所属。私自身がわくわくすると思うものを常に追い求めてきたことに後悔はないが、就活という二文字が脳裏をよぎった時、私の今までの人生は、一体何の役に立つのだろうか、と考えこんでしまったのだ。急に芸術分野と距離をとろうとして、一般企業のインターンを数社受けたが、上辺だけの志望動機と面接ではもちろん落ち、自分は結局何もできないのでは、と絶望した。藁をもつかむ思いで応募したのが、あうるすぽっとのインターンシップである。

実際に活動が始まると毎日が一瞬ですぎていった。すべてがはじめての経験だった。芸術を通して人と関わる現場に制作サイドで携わることは、芸術と社会の関わりを大学生活で模索していた私にとって最適の場所であった。にゅ～盆踊りで豊島区中を自転車でまわったこと、台風の中準備を進めたこと、老若男女、国籍問わず、手を合わせて踊る来場者の笑顔、その他忘れることのできない沢山のシーンに出会い、多くの人々に出会った。やはり芸術には大きなパワーがあることを確信した。しかし、壁にもぶつかった。インターンを始めるまでも、数々の団体で活動をしていたが、決定的に異なることが、あうるすぽっとは公立であるということだ。すべてに対して責任が伴い、特に「伝える」ことの難しさを痛感した。世間へあうるすぽっとの情報を発信する時、どのような言葉を使うのが適切か、魅力がより伝わるか、価値を感じてもらえるか。Web 書き込みの文章を一つ作るのに、チラシを一枚作るのに、どれくらいの時間をかけただろう。今まで数をこなすことを優先してきた私にとって、一つ一つ細部までこだわり、考えぬくことは難題であった。

また、8 人のインターン生全員に今の状況を正確に伝え共有することも「伝える」ことの難しさを痛感した一つの原因だった。文章だけで誰にでも同じ意味を伝えるのは本当に難しい。常に相手の立場で物事を考え様々な状況を想定しなければならないこと、顔を合わせて話すことの大切さを実感した。

就活解禁日が近づき、「発信する」職業に興味を持っている。9 ヶ月を通して、伝える難しさと同時に達成感も感じていたのかもしれない。また、あうるすぽっとでの活動を始め、今まで経験してきた NPO での活動や、ボランティア、すべてに共通して、「もっと多くの人に知ってほしい！」との思いを何度も抱いた。多くの時間をかけて経験し、得てきた、芸術分野の魅力、そして現状。私の経験の一つとしてだけ残しておくのは勿体無いし、発信される情報が増えれば増えるほど、注目され、活性化するはずである。そして芸術分野がそうであるように、世の中には‘人に知られていないたくさんの面白いこと’がまだまだ多く眠っているのではないか、私が見つけ出して人に伝えられたら、と思うと「わくわく」するのだ。私の行動のきっかけはいつも「なんだか分からないけれどわくわくする」との思いからである。あうるすぽっとのインターンは、今まで以上に芸術分野と深く関わると同時に、また新たな「わくわく」と出会う場となった。

直感を信じ、様々な形で芸術に関わり続けた私の人生、何の役に立つのかと考え始めるときりはないが、多くの壁にぶつかろうと、わくわくしてしまうのだ。重ねてきた経験を信じてこれからも歩んでいきたい。



加藤　まりの（かとう　まりの）
明治学院大学　文学部　芸術学科　芸術メディア専攻 3 年

はじめての経験ばかりのインターン生活

研修レポートを書くにあたり、私は、どうしてこのインターンに応募したのかと改めて振り返ってみた。

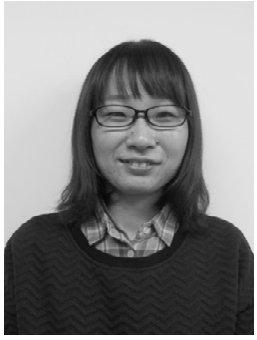
私自身、このインターンに参加する前は、5 年間社会人として病院で働いてきた。その中で、休みを利用し、舞台鑑賞や読書をすること、それらが自分の働くための原動力であり、癒しであった。その中でも大好きな舞台がどのように作られているのか単純に興味があり、勉強したいと思い、履歴書を書いたのが始まりだった。

インターン生活を開始し、はじめから戸惑いの連続であった。はじめて経験すること、今まで感じたことがないことが多くあった。自分の力のなさやどうにもできないこと、周囲からの視線や言葉が気になることも多々あった。このまま続けることに意味があるのかと感じることもあった。しかし、どのようなことでもひとつひとつが自分の糧となり、今後に活かせる、活かしていきたいと考えながらインターン生活を過ごした。それだけ貴重な経験をさせていただいたと感じる。

私はインターン生活で「自分を取り巻く周囲について把握し、考えることの大切さ」を改めて学んだ。相手の望んでいることを把握し、考え、適切なタイミングで相手の求めていることを行うことは何においても大切であると感じることが多かった。また、今回のインターンシップでは、その「相手」が近しい個人に対するものだけでなく、世間の集団というものに向けることもあるということを体感することができた。そのことは今まで経験したことがないことで、とても印象的であった。

特に、インターン生活の集大成として行った、インターン生が中心になって行う企画に関しては、上記のことを学ぶとても良い経験になった。「何をしてもいい」「インターン生らしい発想で」とあった以外は、特に決まりがない中ではじまったインターン企画の立案ははじめてのことばかりであった。それぞれが自分の生活が忙しい中で、できる限りみんなの思いを組み込んだ企画を立案していくことができるように、何度も話し合った。そして、今回企画を立案し、実施していく中で、最も重要であり、困難であったと感じた点は、「企画を提供する対象が求めていることを企画する」という点である。言ってみればとても当たり前のことであるが、何もとっかかりがない中で、まったく顔を見たことがない対象のことを考え、対象の求めていることを企画するということを突き詰めていくということが、とても難しいことだと感じた。また、その「企画の対象とする相手」の決定も頭を悩ませた。その相手が誰でもいいわけではなく、「公共の施設としてフォローが必要な相手とは？」ということを考えていく必要があった。できるだけ多数の、普段目が行き届きにくい対象とは…。それらの今まで自分が持ったことのない考え方からの企画の立案、自分の慣れていない領域での、はじめてだらけの活動は本当に難しいと企画中は常々思っていた。しかし、インターン生で、「私たちだからこそ」「新しい」「公共劇場だからこそ」「できる限り多くの人が求めている」何かを模索している時間は、勉強にもなり、何より頭を悩ませる時間が辛くもあり、とても楽しく、有意義な時間であった。

私にとってインターン生活は、自分の不器用さ、努力不足から上手くいかないこともあった。しかし、上記のことも含め、ここには書ききれないような様々なことを学ぶことができた。また、この年になると、あまり知り合うことのない大学生に出会い、その大学生の考えていることを知ることもできた。そのことも大きな収穫であり、もし今後新人育成に携わるようなことがあったら、その知識も活かせると感じた。他のインターン生はもちろん、職員の皆様含め多くの方々に支えられて、とても貴重なことを得ることのできたインターン生活だった。



杵渕　園子（きねぶち　そのこ）

インターンシップ研修を通して感じたこと

今回インターンシップに参加したのは、観劇に行った際にインターン研修生募集のチラシを偶然見つけたことがきっかけだった。舞台を観ることが大好きであり、三歳からバレエを習っている私にとって、舞台を観ることや舞台で踊ることは、生活の一部になっている。劇場にどのような仕事があり、どのように舞台が創られていくかは、興味を持っていたことであったので、インターンシップに参加してみたいと強く思った。またその当時私は、将来何らかのかたちで舞台に関わる仕事をしていきたいと考えており、劇場でインターンをすることで、私自身の将来へのヒントを得られるのではないかと思ったのも、インターンシップに参加した理由の一つである。

実際に劇場でインターンをして感じたことは、舞台は想像以上にたくさんの人々が関わりあってできているということである。また、その舞台に関わっているそれぞれの人が、自分の仕事に誇りを持って熱い気持ちで臨んでいる姿も印象的だった。私は今まで公演に出演する時には、どうしても公演が成り立つには、出演者の役割が大きいと思ってしまっていた。しかしインターンシップを通して、公演が成り立つためには、制作や広報の方、照明や音響のスタッフの方々、公演の受付業務をしてくださる方など様々な人の支えが必要であることを実感した。このことに気付けたことは、私が今後ダンスを続け、舞台に立っていく上で大きな意味を持ってくると思う。自分中心で踊ってしまうのではなく、まわりの人々の様々な支えによって、私たちが踊れていると感謝しながら踊れることは、私自身の踊りに変化をもたらした。踊る上でまわりの支えを感じて安心する一方で、様々な人の協力が無駄にならないように踊り手としてより努力していかなければならないのだと思った。受付業務や楽屋の裏方の仕事、広報の仕事を自分自身で行うことで、よりそれらのことに実感がわき、この気持ちをこれからも大切にしていこうと考えている。

またインターンシップ中に様々な人と出会うことができたことは、とても良い経験となっている。片山先生やあうるすぽっと職員の方々、インターン生や講師として講義をしていただいた方々、それぞれが自分なりの信念を持って自分で道を切り開きながら強く生きているのが印象に残っている。私は、今まであいまいに流れに身を任せて生きてきてしまったので、私が何になりたくて何を大切にして生きていきたいのかと自分を見直す良い機会となった。そんな時に、公演の成功に向けて身を削るような思いで働いている職員の方々や、将来に向けて懸命に頑張っている同世代のインターン生が身近にいることが有難かった。身近にロールモデルになるような人々がたくさんいたことで、より真摯に自分と向き合うことができた気がする。また、たくさんの刺激を受け、少しでも自分の人生を一歩前に進めることができたと思う。

インターンシップを終えて、将来どのような仕事につくのかは明確には決まっていない。しかし、あうるすぽっとの職員の方々やアーティスト、俳優、ダンサーの方々が仕事をする姿を見て、仕事に対する熱量が大切だと感じた。これから仕事をしていく上で情熱を持つことや、やりがいを感じることのできる仕事をしたいと思う。また、インターンシップを通じて舞台芸術の魅力を改めて感じた。舞台芸術が多くの人々の支えによって人間の力で創り出され、それを多くのお客様が同じ空間で共有し、感動も共有することは人間にしかできない文化活動であると思う。また演じる側にとってはお客様と空間を共有しながら演じられることも舞台芸術の魅力だと感じる。インターンシップを修了する今、この魅力ある舞台芸術に少しでも貢献していきたいと強く思っている。

栗山　結衣（くりやま　ゆい）
お茶の水女子大学　文教育学部　芸術・表現行動学科 2 年

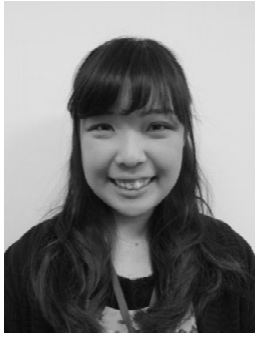
無からの出発

日本の公共劇場を知りたい。舞台が好き。劇場に関わることこそ私の人生。いつか芸術によって社会を変えてみせる。そう意気込んであうるすぽっとに飛び込んだのは 9 か月前。インターンを始める前はとにかく、劇場に対しても、そして自分自身に対しても“美しい”理想の未来を描いていた。しかしインターン生活の中で様々な経験をし、学ぶことによって、少しずつ考え方が変わってきた。

今年度は 8 名のインターン生で活動したのであるが、日々バトンリレーのような毎日だった。シフトの中で引継ぎをしながら作業を進めていく。今日、インターネットの普及で昔よりもコミュニケーションがとりやすくなったかのように思える。しかしバトンは上手く回らない。伝えるということは本当に難しい。仕事の引継ぎ、インターン生企画に対する想い、掲げる目標のニュアンス。8 名で仕事をする中で、いくら発信媒体が充実していても顔を合わせないと伝わらないことがあると学んだ。それは劇場でのインターンシップであったからこそ、なおさら強く感じることが出来た。生で観て、感じて、交流する。劇場だからこそ伝えられること、伝わることがあるように感じる。このことは私の夢物語の綺麗ごとではなく、9 カ月のインターンシップ生活で様々な壁にぶつかった過程を経て行きついた感想である。

劇場の仕事といえば上演する作品に関わるものだと思いがちだが、あうるすぽっと独自の多彩なワークショップでは劇場の新たな役割、可能性を感じることができた。公共劇場であるがゆえ、常に波及効果を考えることの重要だということを学んだ。作業中に聞こえてくる職員の皆様の会話、アートマネジメント講習でのお話では、日本の劇場が抱える問題、行政との兼ね合いなど考えさせられることが多かった。舞台の裏方、ホワイエ、豊島区の学校等様々な場所で事業を提供する側と提供される側の両方と接する機会が多くあった。その中で、アーティストに対しても、ワークショップ参加者やお客様に対しても、求められた行動ができない自分に苛立ち、いかに自分が全体像を見ること、事業に対する理解が不足しているか思い知らされた。

この研修も終わりに近づく今、5 月の私を思い出してみる。あの意気込みはあまりにも浅はかで、傲慢で、思い出すのが恥ずかしいくらいだ。一体何が公共性なのか、芸術・劇場はどんな役割を担っているのか、なにが理想のアートマネジメントなのか、そもそも私はアートに敬意を払っているのか、私にアートマネジメントをする資格はあるのか。インターンシップ生活を通してたくさん吸収したことで、公共劇場の姿を知るどころか、様々なものが私の中でぼやけてきた。無知の知という言葉があるが、私は劇場についても、自分自身についても何も分かっていない。だからこそ終わったというよりは、始まったという気持ちの方がはるかに強い。掴めない物事を掴みたくなる性格上、得体のしれないアートマネジメント・劇場の未来に足を踏み入れてみたい。時間はかかるだろうし、経験も積んでいかなくてはならない。しかし私に何ができるのか試してみたい。そしていつか、自分の手で私なりにぼやけているものを形作ってみたい。あうるすぽっとでの 9 か月を通して”美しい”だけだった理想像は崩れ去り、あらたな理想が生まれつつある。未来の自分が見たら、その理想は、それでもなお浅はかなのかもしれない。しかし 9 か月の気付きを信じて、劇場と共にドラマティックな人生を私らしく歩んでいきたい。“気付き”と“築き”の機会を提供していただいた、あうるすぽっとの皆様、片山先生、インターンの仲間たち、また、見守ってくれた家族、友人に感謝して。



早坂　若子（はやさか　わかこ）
慶應義塾大学　法学部　政治学科 2 年

自分を見つめる

幼い頃から舞台芸術に親しみ、大勢の人の感動を創るような活動に憧れていました。中学、高校とその気持ちに従った進路選択をしてきたものの、受験に失敗したため大学での学びだけはそれを叶えることができず、「自分は本当は何がしたかったのだろう」とモヤモヤと考える日々を送っていました。いよいよ学生生活も残すところ半分となり、自分の将来について真剣に考えはじめたようとしていた3年生の春、このアートマネジメント研修生募集の告知に出会いました。「舞台に関わる仕事を知りたい。将来ための経験のひとつとなれば」、こんな漠然とした思いから応募を決意しました。

あうるすぽっとでの日々は、新しい世界を知り、目から鱗がこぼれ落ちる毎日でした。公演やワークショップ、関わらせていただいた事業のどれを思い返してみても、私にとって新しい発見の連続だったのです。アーティストの想いを形にし、お客様に届けていく様子を間近で体感すること、そしてインターンという立場でありながら少しでもそのお手伝いをさせていただけたことは大変貴重な体験となりました。しかし同時に、職業として舞台に関わることの難しさも知りました。私が今まで観てきたもの、感じてきたものなどほんの一部であり、改めて「自分はどうしたいのか」という気持ちと向き合う日々でした。

そんな最中、インターン生の自主企画「社会人予備軍のためのコミュニケーションワークショップ」の立案に取り組むことは、そのモヤモヤとした思いから脱するきっかけとなりました。劇場にいなければ、就職活動や社交辞令に感じていた違和感を、即興演劇という側面からアプローチするという発想に至ることはなかったと感じます。何事もどうせやるなら楽しい方がいい。少しでもポジティブに方向転換できた方がいい。このような考えに演劇によって気付かされるということは、9 か月前には想像もできませんでした。演劇、そして舞台芸術の面白さを自分の悩みの先に発見することができたのは意外でもあり、憧れていた「大勢の人の感動を創るような活動」の正体はもしかしたら身近なところにあるのかもしれないと考えることとなりました。

私は、舞台芸術には時代が変化してもいつまでも変わらない魅力があると感じています。目で見るだけでなく、エネルギーを肌で感じ、非日常の体験をするということ。予想もしないような喜びや感動を、隣にいる人と共有することができる空間。このような場で得られる涙が出るほどの感情は、何にも代え難いものがあります。しかしながら研修を経て、その要素があるところは舞台と客席がある大きな箱である「劇場という場所」に限らないのではないか、と考えるようになりました。電車に乗っている時、街を歩いている時、食事をしている時。日常の何気ない瞬間にも非日常的な感動や喜びは存在していて、様々な場所で感じられ、必要とされるものなのではないでしょうか。

就職活動を目の前に控えた今、社会に出て何をして生きていくのかと悩むことに終わりは見えません。しかしながらこの 9 か月間で、人が喜びや感動を経験することに貢献できるような働き方ができたら素敵だろうと強く思うようになりました。きっとそのような経験が創り出されるところは、劇場に限りません。そう気付き、自らの視野を大きく広げることができたのです。そして、大袈裟な言い方かもしれませんが、自分自身も喜びや感動に満ちた人生を送りたいと感じています。それは今、大学 3 年生のこの時期に、人と文化が集う劇場あうるすぽっとに研修に来ることがなければ感じることができなかった思いです。

三野輪　万里（みのわ　まり）
大正大学　表現学部　表現文化学科　放送映像・表現コース 3 年

「公共劇場」とはなにか

思えば、9 か月前、私は「劇場」に関してまだ何も知らなかった。もともと私はオペラやミュージカルに触れる中で舞台芸術の世界に興味を持った。大学生活の最後、自分らしいこと、自分の好きなことがしたいと、「劇場」「インターンシップ」と検索し、見つけ出したのが、このアートマネジメント研修だった。迷わず応募した。面接では緊張のあまり滅茶苦茶に言葉を並べたが、熱意は伝わったらしい。晴れて、6 月 1 日に発令通知書を受け取った。この日から 9 か月間、あうるすぽっとという、私がそれまでに“知っていた”劇場とは真反対の世界に十二分に浸る中で、「劇場」や「舞台芸術」に対して様々な考えを吸収することができた。

あうるすぽっとの事業の幅は広い。この 9 か月間を思い出すと、公演事業でホワイエの仕事や楽屋裏の仕事に関わった時のことより、様々なワークショップに同行したことの方が強く記憶されているのは、私にとっても意外なことだ。段ボールと布と針金から城と庭園をつくり出したこと。にゅ～盆踊りや大塚ろう学校のダンスワークショップなど参加者が集って一瞬のきらめきのような作品が生みだされるのを目にしたこと。形あるものでもないものでも、誰かとともにつくるものに魅了され続けた。「劇場」として舞台芸術作品を制作し届けるのが、あうるすぽっとの一つの役割。しかしそれ以上に、地域の人々と関わりながら作品をつくることができるのが、公立劇場であり「公共劇場」であるあうるすぽっとの強みだと私は感じた。あうるすぽっとでの学びをきっかけに、外部のアートマネジメント講座などにも参加して、「地域に根付いた劇場」、「地域に愛される劇場」というものについて考えるようになった。そして、そのためには「劇場が地域や市民を愛さなければならない」と気づいた。ホワイエで受付業務をしたりワークショップに参加・同行する中で、来訪者や参加者、区民の方々のあうるすぽっとへの信頼感や安心感を感じとった。あうるすぽっとの愛は、劇場の来訪者や区の人びとに届いているようだ。私自身、この 9 か月で、それまではあまり足を運ぶことのなかった豊島区や池袋に対して、強い思い入れを抱いた。劇場が人と人をつなぐ拠点となるということを肌で感じる貴重な経験であった。

劇場がその公共性という使命を果たすために必要な要素、「人びとが何を求めているのか」「自分たちの力で何ができるか」について考える上で最も力となったのが、インターン研修生による自主企画だ。企画をゼロから練り上げていった。無から何かを生む大変さ、研修生 8 人の思いをまとめていく難しさを常に感じ続けた日々であった。必要と感じたのは、一人一人が責任感を持つことだ。言葉にすると簡単だが実行は難しい。自分たちの発言や文章が、公立の施設であるあうるすぽっとから発せられるものとしてふさわしいかを逐一考えて、自分の仕事に責任を持つことが、成功への近道だった。

「劇場」という場の意味をあらためて考えるきっかけを得たことは大きな収穫だ。「劇場」に対する思いをうんと広げられた 9 か月間、私は「アートマネジメント」の世界の扉の向こうに足を踏み入れることができた。まだ、明確な答えは出せていないが、この初めの一歩は大きな一歩だと信じている。ホワイエでの仕事を通して感じたのは、お客様にとって、公立でも民間でも「劇場」は「劇場」だということ。「公共劇場」は、公・民を超えた概念であるべきだ。「劇場」はアートのためだけでなく、まず人のためになくてはならない。この人には芸術家もお客様も含まれる。人が集まって人のためを考えることによって文化が豊かになり、文化のうるおいが人を豊かにする。その好循環。「劇場」はその始点であり中心点だというのが、私の今のところの回答である。

宮田　紗也香（みやた　さやか）
慶應義塾大学　法学部　政治学科 3 年

編集後記

2014 年度のインターン生は、学部の 2 年生から社会人まで、女性ばかりが 8 名という賑やかな体制となりました。これまで日程調整に苦労が多かった特別講習を、今回からはあらかじめ日程を指定するかたちで運用したところ、結果的に出席率は高くなったように思います。また、特別講習を日曜日の午前中に設定することで、講習後に講師と一緒に昼食を食べながら懇談する機会を持つことができたため、インターン生たちと講義中の質疑応答とは異なるインフォーマルなコミュニケーションが行えました。大学の講義でも、質問があっても教室では手を挙げず、あとでコメントカードに書いてくる、というのが最近の学生の特徴なので、このような機会は貴重なものです。

国レベルでは、現在、第 4 次の「文化芸術の振興に関する基本的な方針」の策定が進められています。芸術や文化が社会において果たす役割やその可能性についての認識は従前よりはかなり広まったと言えますが、それを支える基盤、特に人的基盤は脆弱なままになっています。第 4 次基本方針では、2020 年までの間に、こうした環境を大きく変えていくことをうたっています。芸術や文化を支える人々が安心して希望を持ちながら働けるような社会をつくるための基盤整備が進められます。言い換えれば、文化の領域における雇用機会の質的・量的充実です。

インターン生の皆さんは、このあと様々な進路に進むことになると思いますが、仕事として、あるいは市民として、芸術や文化を支える一翼を担っていただくことを期待します。

片山泰輔

平成 26 年度

あうるすぽっとアートマネジメント研修事業報告書

あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）

公益財団法人としま未来文化財団

平成 26 年度
アートマネジメント研修事業報告書

発行日　2015 年 3 月 31 日
発行所　公益財団法人としま未来文化財団
あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
〒170-0013　東京都豊島区東池袋 4-5-2 ライズアリーナビル 2・3F
TEL　03-5391-0751　http://www.owlspot.jp/
編　集　あうるすぽっとアートマネジメント研修生
監　修　片山泰輔
助　成　一般財団法人地域創造、平成 26 年度文化庁地域発・文化創造発信イニシアチブ

©2015 OWL SPOT

あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
公益団法人としま未来文化財団